

水辺のかがやき

平成18年度「川に学ぶ」活動事例集



2007.12

リバーフロント整備センター
財団法人  Foundation
for Riverfront Improvement and Restoration

表紙の写真

<p>ずしし環境会議 まちなみと 緑の創造部会の皆さん (神奈川県 / 田越川)</p>	<p>群馬県邑楽郡邑楽町立高 島小学校の皆さん (群馬県 / 渡良瀬川)</p>
<p>サンちゃんと友だちになる会 の皆さん (広島県 / 江の川)</p>	<p>東茨城郡大洗町立祝町小 学校の皆さん (茨城県 / 那珂川)</p>

はじめに

平成10年6月、河川審議会「川に学ぶ」小委員会より、「『川に学ぶ』社会をめざして」が提言され、「川に学ぶ」社会の実現を促進するために、さまざまな取り組みが始められました。

財団法人リバーフロント整備センターでは、平成11年度から市民団体等の方々が河川・海岸等の水辺で行う自然体験や環境教育等の活動に対し、助成する「川に学ぶ」活動助成事業を行っております。

平成18年度は、全国各地の市民団体・小学校等から、河川や水辺における、さまざまな環境教育に関する活動について、231件の応募をいただきました。このうち、71団体の方々が、本事業を活用してさまざまな活動をされました。

この冊子はその活動状況を紹介させていただくものです。これが活動を実践されている方々の励みになるとともに、今後の多くの川に学ぶ活動の参考になれば幸いです。

なお、本冊子に記載されている河川名等は、地域・地区での呼称もあり、必ずしも管理者が定める名称ではありません。各団体から提出のあった活動報告書をもとにして記述しました。

同様に、活動目的・活動内容・活動の効果・反省点等についても、活動報告書を概ね原文のまま記載しています。

平成19年12月

目 次

1	馬木っ子ふるさと環境探偵団 島根県 砂田川他	27	ふるさと侍従川に親しむ会 神奈川県 侍従川
3	NPO白神自然学校一ツ森校 青森県 赤石川	28	半田せせらぎ会 群馬県 利根川
4	さくら湖自然環境フォーラム実行委員会 福島県 大滝根川	29	薩摩川内市立入来中学校 鹿児島県 樋脇川
5	群馬県邑楽郡邑楽町立高島小学校 群馬県 渡良瀬川	31	長野ホテルの会 長野県 善光寺平用水他
7	漁川子どもの水辺協議会 北海道 漁川	33	NPO五ヶ瀬自然学校 宮崎県 五ヶ瀬川
9	国分川夢クラブ/まつどの川づくり楽会 千葉県 国分川	35	草津塾 滋賀県 葉山川
11	銚田市立新宮小学校 茨城県 北浦	37	女鳥羽川の自然を考える会 長野県 女鳥羽川
13	蔵のまち清流づくり実行委員会 福島県 田付川他	38	日野市立滝合小学校 東京都 浅川
14	名古屋堀川ライオンズクラブ 愛知県 堀川	39	NPOマングローブEEクラブ 沖縄県 うるま市州崎マングローブテラス
15	香川の水辺を考える会 香川県 有明浜	41	ずしし環境会議 まちなみと緑の創造部会 神奈川県 田越川
17	石川県加賀市立東谷口小学校 石川県 動橋川	43	木更津工業高等専門学校 千葉県 平川
19	須賀川に清流を取り戻す市民の会 福島県 下の川	45	EIZOH.COM 京都府 紙屋川
21	沙流川愛クラブ 北海道 沙流川	47	NPO川島ネイチャークラブ 埼玉県 荒川他
22	NPO後志利別川清流保護の会 北海道 後志利別川	49	山形地区住みよい環境推進協議会 青森県 浅瀬石川
23	NPO印旛野菜いかだの会 千葉県 印旛沼他	51	梅津まちづくり委員会 京都府 有栖川
24	NPO都市環境研究会 東京都 神田川他	53	和泉川東山の水辺愛護会 神奈川県 和泉川
25	湧別川流域会議実行委員会 北海道 湧別川	55	NPO水環境ネット東北 宮城県 名取川
		56	西郷くらしの会 福島県 阿武隈川

57	桐生市立東中学校 群馬県 桐生川	87	サンちゃんと友だちになる会 広島県 江の川
59	三浦村立美浦中学校科学部 茨城県 霞ヶ浦他	89	でさきっずくらぶ 岡山県 出崎海岸
61	環境学習フォーラム北海道 北海道 精進川	91	NPOあそんで学ぶ環境と科学倶楽部 東京都 日本橋川他
63	松川水環境保全推進協議会 長野県 松川	92	隅田川市民交流実行委員会 東京都 隅田川
65	東茨城郡大洗町立祝町小学校 茨城県 那珂川	93	森の仲間たち 山形県 掘立遊水地
67	五條市立阿太小学校 奈良県 吉野川	95	浜尾遊水地再生協議会 福島県 浜尾遊水地
69	ふる里発見の会 鳥取県 日野川他	96	NPO大淀川流域ネットワーク 宮崎県 大淀川
70	三峰川みらい会議 長野県 三峰川	97	NPO吉野川みんなの会 徳島県 吉野川
71	NPO登別自然活動支援組織モモンガくらぶ 北海道 幌別来馬川	99	群馬県邑楽郡邑楽町立中野東小学校 群馬県 渡良瀬川
73	兵庫県南あわじ市立南淡中学校 兵庫県 百間堀	101	丹波市立西小学校 兵庫県 葛野川
74	多賀城市第二中学校 宮城県 砂押川	103	芦田川環境マネジメントセンター 広島県 芦田川
75	自然と文化の森協会 兵庫県 猪名川	105	博多市立博多中学校パソコン部 福岡県 博多川
77	猪名川フォーラム実行委員会 兵庫県 猪名川	106	九十九曲がりの会 新潟県 能代川
79	琵琶湖市民大学 滋賀県 野田沼	107	山形県立加茂水産高等学校水産生物部 山形県 油戸川他
81	岡崎市立美川中学校 愛知県 乙川他	109	尾道市立木頃小学校 広島県 藤井川
83	自然と暮らしを考える研究会 佐賀県 巖木川	111	栃木県那須塩原市立鍋掛小学校 栃木県 清川
85	筑後川まるごと博物館運営委員会 福岡県 筑後川	113	新宮市立蓬萊小学校 和歌山県 高田川他
86	白川ダムビジョン推進会議 山形県 白川	115	上川町立上川中学校 北海道 石狩川

体全部で大馬木川の自然を感じる体験活動

▼活動の目的

私たちの住むこの「馬木の里」も、少しずつですが変化しています。この変化を私たちは見逃すことなく、よりよい方向への変化に向かうよう自分たちにできることから活動を始めます。そのためには、ふるさと馬木の自然を通して調べ、馬木について知り、馬木のために活動します。学校で学んだ環境学習をもとに、さらに自分で課題を見つけ、地球環境についても考えていく活動を大切にします。

また、地域の大人の方へも、自分たちの活動結果を積極的に知らせ、地域の大人の方と一緒に活動を進めることができるよう努力します。エコクラブを設立することで、地域の中で環境を考え・大切にしていこうとする輪を広げ、地域の自然をみんなで守っていけるよう呼びかけます。



全員でゴミの種類分け

▼活動の内容

年間活動計画に基づき、身近な自然の中へ出かけ、以下の体験的な活動を実施し、環境保全意識を高めるために活動を実施した。

- 1．河川水質調査
- 2．川遊び
- 3．水生生物観察会
- 4．ホタル生息調査
- 5．ホタル観察会
- 6．岩魚の飼育活動
- 7．河川環境美化活動
- 8．樹木観察会
- 9．環境保全呼びかけ（河川環境保護ポスター製作、研究発表会等）

学校での学習と関連を図った野外活動を中心として活動を組織している。

- 5/28：砂田川周辺奉仕作業1
- 6/15-7/14：ホタル生息調査実施
- 6/29：ホタル観察会
- 7/27-28：吾妻山キャンプ、川の生き物観察会
- 8/9：大馬木川の生き物観察会
- 9/1：砂田川周辺奉仕作業2
- 9/12：宍道湖・ゴビウス見学
- 10/22：サイレン山樹木観察会の実施
- 11/19：馬木っ子まつり（学習成果発表会）
- 年間を通じて5回：宍道湖・中海流入河川水質調査実施



婦人会のみなさんと砂田川奉仕作業



全国水環境フェアで活動報告



「馬木っ子祭り」で学習の成果を発表

▼活動の効果

3年間の取り組みの中で、こども達の日常生活の中に川というフィールドが位置づけられつつあり、実際の活動を通して「川は楽しい」「川は気持ちいい」という思いを育てることができている。川に実際に入り、五感をつかって川を感じる体験を積みせると共に、科学的な手法も経験させる機会も設定することで、川への関心や知識を高めることに成果をあげている。

▼苦勞した点・反省点

組織結成3年目であるため、中心となる活動は昨年度と同じとして、実施内容を一部変更して実施した。野外活動であるため天候で左右されることが多かった。特に今年の夏は、天候が不順であり予備日の設定も講師等の調整上困難な点が多かった。児童の活動に対し、支援していただけたスタッフの充実を図る必要性が高いと感じた。

審査員から

川を体験し川を感じさせることで、こどもの日常生活に川が位置づけられつつあるとのこと、活動が続くといいですね。(M・M)

馬木っ子ふるさと環境探偵団

福田 充雄 / 須田 英典

maki-es.@town.okuizumo.shimane.jp

<http://www.town.yokota.shimane.jp/maki-es/>

川を愛するきっかけづくり

▼活動の目的

今回調査した赤石川は、自然学校の近くを流れ、白神山地のど真ん中を貫く川です。この赤石川の水質等を調査し、その赤石川の水を引いて養殖されているイトウの養殖場を見学することにより、自分たちの生活に関わる川のことを知り、この川を愛するきっかけとなしてほしい。

▼活動の内容

- ・赤石川の水質調査（COD）
- ・水温計測
- ・紫外線調査
- ・イトウの養殖場を見学



イトウの養殖場見学



水質調査



イトウの成長過程

▼活動の効果

自分たちの普段の生活に直接関わる赤石川を調査したことにより、子供たちはこの赤石川を環境を今後守っていかなくてはと伝えてくれたと思う。また、イトウの養殖場では、この赤石川の水が貴重なイトウの生命を育てているのだと知り、興味を示していた。

▼苦労した点・反省点

今回の参加者の中には小学校の低学年もいて、低学年でも興味を持って楽しんで調査できる内容にしなくてはいけないと思った。

大滝根川の自然体系の変化を探るフォーラム

▼活動の目的

三春ダム(さくら湖)ができて、本流である大滝根川流域の自然体系が過去現在とではどのように違い、どのように変化したのかなどについて、地元の小中学校や専門家の発表、パネルディスカッションから構成されるフォーラムを開催する。そのことにより地域の自然環境に親しむ機会を提供し、自然環境の大切さを訴える。

▼活動の内容

フォーラムでは、基調講演、小学校1校・中学校1校の研究報告、専門家等5名の研究報告や紹介、コーディネーター1名・パネラー4名によるパネルディスカッションを実施。各パネラーが取り組んでいる環境づくりの事業の説明と「大滝根川流域のこれからの土地利用と水環境」を題材にした討論を行った。



三春町立沢石中学校2年生の研究報告

▼活動の効果

今回のテーマ「土地利用と水環境」は、農業従事者や関係者にとっては、体験に基づくものなどたいへん関心のある研究報告や紹介であり、参加者からの発表者への質問も多かった。また、試験的な研究(外来魚捕獲後の有効活用)の成果として、通常のリンゴと外来魚を施肥したリンゴの試食を参加者にしてもらい、どちらがおいしかったかのアンケートを実施した。結果は、通常のリンゴのほうがおいしかったとの答えが若干多かった。しかし毎年施肥することによっての味の変化も今後の楽しみとなった。農家で取り組んでいただけのような働きかけとなったのではないだろうか。参加者参加型の今までにないフォーラムとなった。

審査員から

広い視野での取り組みが継続されており、川の自然を通じた地域連携の可能性が期待されます。(D.Y)

▼苦労した点・反省点

今回で第7回目を数えるフォーラムであるが、毎回発表していただく学校や専門家、基調講演者やパネリストの人選と依頼については苦心している。特に学校については、年間の授業計画が早めに決定してしまうために、総合学習のなかで環境問題に取り組んでいないと難しい。配布資料のなかにフォーラム全体についてのアンケート用紙を入れ、感想を書ってもらった。そのなかでの指摘に、「開始時間(9:00)が早い」「終了時間(16:30)を早く」「PRが足りない」「あまり盛会とはいえなかった」「開催時期を桜の時期や町イベントに合わせたら」などの意見や要望があった。実行委員会事務局としても痛感しているご指摘を受け、苦労した点と併せて、今後のフォーラム開催の参考としたい。

川から学ぶ「考える力、生きる力」



「川流れ」で川を体験

▼活動の目的

渡良瀬川をフィールドにし、自然体験により豊かな感動を与え、学習への関心・意欲を喚起、課題意識を高め課題追求、解決の過程を通し、生きる力と心の成長を図る。また、自然環境の大切さ、保全の必要性を気づかせるとともに、支援者へ感謝する心や自ら危機を察知・回避する力を養う。



川を肌で感じながら上流へ

▼活動の内容

1. 渡良瀬川体験学習 4年生では「楽しさいっぱい渡良瀬川の四季」をテーマに、太田市の中流域の川と河川林をフィールドとして春夏秋冬の渡良瀬川の体験学習を行い、川の素晴らしさや不思議さを体感する。5年生では「渡良瀬川と地域の川」をテーマに、渡良瀬川上流足尾町、中流太田市、下流古河市の体験学習を行って川の変化を捉えたり、つながりを確かめたりして川についての知識を深める。6年生では、「川と人々」をテーマに、足尾町の備前楯山登山や足尾銅山、自然復旧事業の見学、渡良瀬遊水地での学習等を行い、歴史を中心に川と人とのかかわりを学ぶ。
2. 活動発表会 自分たちの活動を地域の人たちに対し発表し、河川環境を守ることの大切さを伝えていく。
3. ボランティア活動 自然環境保護と川への感謝の気持ちの一つの表現として河川敷ごみ拾い活動を行う。



ヤマメ、イワナの放流



冬の渡良瀬川でバードウォッチング

▼活動の効果

平成12年度から実施してきた渡良瀬川体験学習の成果が評価され、平成18年度には(社)日本河川協会より河川功労者表彰を受賞する。また、上毛新聞の地方版にも学習の様子が毎年掲載され地域に紹介されている。生き生きと体験学習に取り組む児童の姿が、保護者や地域の理解や賛同を高めており、積極的な支援者(平成18年度は延べ106人)を増やすことにもつながっている。

▼苦勞した点・反省点

学習場所への児童輸送のためのバスや必要物資運搬のための車の確保(バスは国交省、車はJAの協力を得て配車していただいている。)を恒常的に継続していくことと、体験学習への支援者も多く助かっているが、教職員数が減少する中で万全な安全策を落ち度なく確保していくこと。

漁川から学ぶ「ふたつの心」

▼活動の目的

地域の共有財産である漁川を舞台に、河川環境の重要性を啓発する人材～地域の最も大切な共有財産である子どもたち～の育成活動をとおり、地域交流と世代間伝承を行うとともに相互に助け合う意識を高め、良好な地域社会の創造を図ることを目的として活動しています。子どもたちが漁川の自然の中でさまざまな事を感じ取りながら、川での楽しさや恐ろしさを知り、自ら危険を回避するための知識や方法を身につけると共に、学校や学年の違う子どもたちが活動を共にすることによって、他人を思いやる心、協力する心を持った「人間」として成長してくれる事を願い、活動しています。



ゴムボートで川下り

▼活動の内容

平成18年6月24日「漁川水辺の楽校・春」

第1回の水辺の楽校は、はじめて川の中に入る子どもたちが多くいたことから、川の性状や川での注意事項などについて、スライドを使った室内講習からスタートしました。そのあと、漁川水辺の楽校の河川敷に場所を移し、ペットボトルとナイロンロープで簡易レスキューロープをつくり、助け方・助けられ方の模擬トレーニングをしました。その後川の中に入り、川の流れを知るために川歩きやライフジャケット遊泳をしながら、簡易レスキューロープを使用した助け方・助けられ方を体験しました。最後は、みんな思い思いに川の中に入って魚すくいを楽しみました。

平成18年8月26日「漁川水辺の楽校・夏」

春に引き続き、川で楽しく安全に遊ぶための体験プログラム・上級編を実施する予定でしたが、北海道ではめったにない「水遊び日和」に恵まれたことから、1日をめいっぱい漁川で遊ぶことにしました。釣りや魚すくいをした後は、ゴムボートを利用して約1.6kmの川下りに挑戦しました。この途中はペットボトルを利用した浮力体験も行いました。子どもも大人もずぶぬれになって北海道の短い夏を楽しみました。

平成18年10月9日「漁川水辺の楽校・秋」

漁川の河原でサケの生態を学習し、実際に遡上してきたサケを観察しました。そのあとは、河畔自然体験に出かけ、コクワヤクリ、ヤマブドウなどをとって食べるなど、身近な自然の中で宝物探しをしました。探検の途中でとったイタドリ虫は魚の餌にして、お昼には釣り上げたヤマメを塩焼きにして食べました。最後は水温12度という条件にもかかわらず、勇敢な子どもたちが川流れに挑戦し、震えながら歓声をあげていました。

平成19年2月4日「漁川水辺の楽校・冬」

吹雪模様のあいにくの天気でしたが、子どもたちは本年度最後の水辺の楽校を屋外で元気に楽しみました。まず、漁川に飛来する野鳥を観察するため、雪をこいで河川敷に出かけましたが、マガモが数羽見られたほかは、あまり野鳥に出会う事ができませんでした。そのあとは、夏の川下りに使ったゴムボートを堤防に運び、みんなで乗り込んで滑り降りました。大歓声をあげて何度もすべり、終了させるのが大変だったほどです。大人も子どもに戻って一緒に楽しみました。室内に戻ってからは、自分がサケになったつもりでうまれた川に戻るゲームをし、自然環境の大切さを学習しました。最後に1年を通して水辺の楽校で楽しかったこと、またやりたいこと、やってみたいことを話し合い、春の水辺の楽校での再開を約束しました。



大好きな魚すくい



遡上してきたサケの観察

▼活動の効果

第1回目の参加者は子どもたちだけでしたが、第2回目からは親子連れでの参加がありました。両親が共働きであったり、休日に仕事があったりする方も多いようですが、子どもたちが水辺の楽校から帰って両親に報告するなどして、少しでも共感が得られたからではないかと感じています。参加したくても参加できない親御さんの中には、わざわざ昼休みに差し入れを届けてくれた方もいらっしゃいました。学校や学年が違って、みんな打ち解け、お互いに協力しながら活動しています。遊びの中からいろいろな事を感じ取り、素直に成長してくれた事を実感しています。

▼苦勞した点・反省点

川の中での活動において運営スタッフが少なく、参加していただいた大人の方にもご協力をいただきながらプログラムを何とか実施する事ができました。今後は、親御さんや地域住民の方々などにも広く参加を呼びかけ、本当の意味での地域交流と世代間伝承を現実のものにできるよう、方策を検討する必要があると考えています。



オリジナル教材で生き物を学ぶ



川の工事現場で工事の様子を聞く

審査員から

川でのさまざまな活動を通じて子どもを育てる。もっとたくさんの住民の参加を得て、世代間伝承ができるといいですね。(M・M)

国分川の水質回復を願って浄化実験

国分川夢クラブ / まつどの川づくり楽会



みんなで協力してペットボトル浄化器作り



生活排水に混じっているいろいろな汚れ物質

▼活動の目的

小学校の約600m東側を流れる国分川は、流域の各家庭から生活排水などが流れ込み、処理施設の整備遅れも重なって川の水は汚れています。

身近な国分川の水の汚れをストップさせるため、家庭の排水から食用油、洗剤、シャンプー、食事の食べ残しなどを取り除くために毎日どのような生活をすればよいのか。

小学生の学習成果の協力を得て、川の水を汚さないための行動メッセージを家族に届けることを目的にしました。

▼活動の内容

小学生に関心の高い「川の水はどうして汚れるのか」、また「汚れた水をきれいにするにはどうすればよいのか」。家庭で川の水を汚さないための行動を起こしてもらうため、つぎの学習をしました。

(1) 「私の家の川の水を汚さない度チェック」～事前のアンケート調査(家族と相談して)

(2) 食用油、洗剤、シャンプーなどが生活排水となって川の水が汚されていくようす

(3) ペットボトルを加工し、各種ろ過材を入れ、ペットボトル浄化器作りを体験

(4) 手作りペットボトル浄化器を使って汚れた水がきれいになっていくようす

(5) 水質検査(パケットテスト)で、いろんな水のきれい度に差があるようす

身近な北浦から学ぶ、水の環境と自分の生活



パックテストの練習



自分たちでシナリオをつくり、北浦の生物や植物について発表

▼活動の目的

北浦を中心とする水辺の環境について、野外学習や校外学習などの観察・調査活動、自然体験、社会体験活動を通して学び、自然の美しさや豊かさ、環境保全の大切さなどを理解できるようにするとともに、よりよい環境を創造していこうとする実践的な態度を育成することが目的です。

▼活動の内容

地域の指導者を招いて北浦の生き物や植物について学習したり、北浦湖岸の清掃活動をしました。

パックテストを用いて、北浦や学校ビオトープ等の水質検査を行いました。

「全国生涯学習フェスティバル まなびピアいばらき2006」の一環として開催された「とことん茨城を知る“水と環境”フォーラムin鹿行」に参加して、北浦をテーマに学習した内容を、工夫して映像や劇にまとめて発表しました。



観察とクリーン作戦をおこなった5年生



バックテストの測定練習



5年生のプレゼンテーション

▼活動の効果

児童の身近にありながら、あまり真剣に向き合ったことのない北浦について、地域の専門家から御指導をいただき、実際に触れ、調べ、まとめ、発表することによって、水の環境と自分の生活が密接に関係していることに気づくことができました。

「とことん茨城を知る“水と環境”フォーラム in 鹿行」で、多くの人々の前で発表ですることができたことや、広報誌等で取り上げられたことによって、保護者や地域の方々から認められ、児童の自信につながり、活動の意欲がさらに高まりました。

▼苦勞した点・反省点

自然環境が対象なので、天候や行事等との関係で活動時期の調整に苦勞しました。

活動時間の十分な確保がむずかしく、当初計画していた外来魚種の駆除及び肥料化や燃料化のリサイクル活動の一部しか体験ができなかったことを反省しています。計画を練り直し、さらに内容のある活動に発展させたいと考えています。

鉾田市立新宮小学校

正木 邦夫 / 豊田 昌幸

h-singu@city.hokota.ed.jp

http://edusv.city.hokota.ed.jp/elementary_school/hok_singu/

清流復元を目指した情報収集

▼活動の目的

COD（科学的酸素要求量）は平均値を5以下とし、将来は2～3、NO₂（亜硝酸）は平均値を0.02以下とし、0.01～0.02の数値実現を目指して長期的、継続的に取り組み清流復元実現の促進を図ることを目的とする。



幹線用水路下流にて生物の採取

▼活動の内容

蔵のまち清流づくり実行委員会会則（事業）第4条(3)清流復元事業の調査研究に関するに基づき、清流対策事業への一助とするため市内の一級2河川(田付川、押切川)とその河川水系筋の水路、側溝の計20箇所の水質、COD(化学的酸素要求量)、NO₂(亜硝酸)を簡易型水質検査パックテストにより測定し、水質状況も含め指標生物やその他の生物の調査等も実施するとともに、この結果をチラシや市広報などで市民に水質汚染の度合いを経年変化で公表し、生活雑排水による水質汚濁防止の啓蒙を図っている。

▼活動の効果

今回の調査は、調査日が延び延びとなったとともに1班体制から2班体制となってしまったが、時間を掛ければ少人数でも十分調査ができる事が立証され自信ともなった。又、この調査数値の結果や活動はパンフレットや市広報などで市民に公表する計画であり、市民が家庭でできる生活排水対策への取り組みの一助とし、清流復元への協力を得たいと考えている。



水温、COD、NO₂の測定

▼苦勞した点・反省点

今回の調査は7月から雨の日が多く続いた事で日にちの目処が立てず、公用車の手配等で10月26日となってしまったが、前々日が雨となり、河川の水の濁りが気になった。しかし、前日の午後から河川の水も透明度を増して当日の調査には大きな影響は見られなかったが、河川の水量は増していたため水生生物採取での水難事故には注意を払った。他に通常見られる魚影は姿を消していた。又、天気次第で調査見通しが立てられなかったのが残念だったのと時期的に様々な行事の月と重なり、当日の人数は12人から7名となり2班体制から1班体制で調査する事となり、又、途中で2名が仕事等で抜けた結果、参加者の調査に伴う時間的負担は大きくなった。今後も毎年決った月・日での調査をしたいが、いつもその年による天候に左右され、調査の日にちが変わることが残念である。

立体マンガで堀川浄化の啓発活動



立体紙芝居で堀川の歴史などを学ぶ



クイズで復習

▼活動の目的

堀川浄化のためには、次世代を担う小学生などへの啓発活動が不可欠である。この活動は堀川流域の小学校と連携し、講堂などを使って堀川の歴史、堀川が汚れた川になってしまった経緯、堀川を浄化するためにはどうしたらよいか、というポイントを主に小学生を対象に大型立体マンガを使ってわかりやすく説明する。堀川流域の小学校のキャラバン講演を続けることによって多くの小学生に対する啓発活動を息長く続けてゆく考えをもっている。

▼活動の内容

今回使用した大型立体マンガが劇「堀川ものがたり」は、2005年の愛・地球博のモリゾー・キッコロメッセで1週間上演をしたものである。このとき製作した舞台装置を有効利用し、かつ市民有志が結成した劇団に公演を依頼し、小学生にもわかりやすく堀川学習ができるようにした。また学習効果を高める目的と児童の興味をひきつける目的から、堀川の開削奉行である福島正則の武者姿に扮した当クラブのメンバーが堀川クイズを行った。

▼活動の効果

体育館で行われたこの公演には、学校側の配慮で保護者も招待され、子供たちと一緒に堀川の歴史の勉強をすることができ、クイズもふくめて大人にも大好評であった。

▼苦勞した点・反省点

立体漫画劇の装置がたいへん大きなものであるため、はじめて学校への出前公演をするにあたり搬入、組み立てに時間がかかるなど苦勞した。また歴史の基礎知識などがない低学年の児童をあきさせない点で苦勞をした。事前に先生とシナリオなどの詳細な打ち合わせをかなり時間をかけておこなった。クイズには体操の赤白帽を使うなど先生のアイデアがたいへんうまくいった。

審査員から

「大型立体マンガ」は小学生にもわかりやすく、児童の興味を引くことから、息の長い取組みになってほしい。(T.H)

海辺の植物から学ぶ命の尊さ



海浜植物の観察する高室小学校の5年生たち



乾燥に耐え抜くための植物構造を知る

▼活動の目的

豊かな自然が残る有明浜で、海辺の植物を通して、自然とは何か？環境問題とは？自然との共生とは？を理解するとともに、厳しい環境の中で生き抜くために工夫を凝らしている植物と自分の生き方を比べ、命の尊さを考える。

▼活動の内容

潮の香り、波の音、真夏の砂浜の暑さ、季節風にあおられて立つ白波、五感を使って自然を感じる。

海浜植物の生態、根を深く長く伸ばして水分を得る、葉や茎を肉厚にして水分を貯える、葉に光沢を持って直射日光を反射させ、地下茎を伸ばして繁殖するなどを観察する。

漂着ごみを拾いながら、漂着ごみがどこから来るのか考える。



ハマナデシコの観察



採取してきたハマヒルガオ
などの観察学習

▼活動の効果

身近に豊かな自然があることを再認識し、大切に守っていかうとする意識が芽生えている。

行政も地域の人たちが、ふる里の自然を守ろうとする意識と活動を見て協力してくれる。

有明浜で海浜植物の保護と環境学習を7年間継続してきた観音寺東小学校が、今年6月、環境大臣より「地域環境保全功労者賞」を受けた。

▼苦勞した点・反省点

平日に活動できる人材が不足。学校活動の支援が十分できない。

活動には費用がかかる。レベルの高い活動ほど費用が多くかかるので思う様な活動ができない。

動橋川はぼくらのともだち



石を結びつけた縄を左右に揺らして底魚の追い込み

▼活動の目的

地域を縦断して流れる身近な動橋川を学習材料に、伝統的な川漁や川遊びなどの体験活動を行うことで、子どもたちがより川と人の結びつきやつながりを知り、深めることができる。

川の自然環境の変化を水生生物や流域の植生の変化で調べる環境学習などを通して、子どもたちは豊かな自然に触れ、体験し、生きた智慧を学ぶとともに、自然に感動する心を育てる。

▼活動の内容

川とともに...動橋川の上・中・下流における水生生物の採集による川の汚れ調べ、動橋川が注ぐ柴山瀧の植生や生き物調べ、瀧の概観調べによる環境学習

川遊びの会...PTAの親子ふれあい活動の一環。上流にある兵太郎堰の地点で堰を利用した滑り台や岸辺から淵への飛び込み、木のツルを利用したブランコなど親子で自然を利用した遊びを満喫する。

川とくらし...ざんざらこという昔の川漁の仕方を体験する。(縄に川石をくくりつけ、川幅いっぱいに縄を広げ大勢の人で縄につけられた石を川底にこすりつけながら、底魚を川上に待ち受けている網や笊に追い込む漁)投網や四ツ手網の体験。



松下会長から湖岸の植生についての説明



四っ手網で魚をとろう

▼活動の効果

について

動橋川を上・中・下流・潟と川の流に沿った環境調査で、人のくらしによる生活廃水や農業廃水による川の汚染、そして潟の汚染を深刻に受け止めることができた。豊かな川を取り戻すには、水質浄化対策とともに、森と結びついていることなども知る事ができた。

について

プールでしか泳いだ事のない子どもたちにとっては、変化の多い川遊びは、冒険心・探究心をくすぐり遊びに夢中になっていた。保護者にとっても、子どもの頃を思い出し、自然と触れて遊ぶことの大切さ実感できた。親子の共通体験で、それぞれのコミュニケーションがより深まった。

について

昔は、結いで村の作業が行われ、人々の絆が深まった。伝統的川漁ざんざらこを行うことで、子どもたちも、地域の人たちも、共同で力をあわせて事を成し遂げる心地よさを体感した。それとともに、魚の習性を良く知り尽くし、必要な分だけ必要に応じて獲るという昔の人の考え方を体験を通して学ぶことができた。そのため、地域の行事として毎年夏に行われることとなった。

▼苦勞した点・反省点

川へ入り活動するので、天候に左右されることが一番の苦勞。

の活動は、保護者とともに行う活動も入れると親子の話し合いもなされ、より効果的。

の活動地点は川遊びには最適なので、より地域にアピールし、家族で楽しむ場所とするとよい。

で川石を縄でしっかりと結びつけていくことが大人でも難しい。縄結びの講習が事前にいる。



水生生物の分類

下の川の自然再生を目指して



水辺の生きもの調査



水質浄化の取り組み

▼活動の目的

我々の会の水質浄化活動に市立第三小学校が賛同し、平成12年から5年生による活動の協働と併せて環境学習が行われています。川での自然体験や環境学習の活動を通して水環境の大切さや自然環境保全の必要性を学びます。

▼活動の内容

水性生物の調査・観察やCODパックテストによる水の汚れ調査など自然環境調査を行いました。またごみ拾いなどの美化活動、さらには地元産の石を使っての瀬や淵などの川の多様な流れを創出することを体験し、それらが河川の自浄作用を作り出すことを学びました。



CODパックテスト



「須賀川環境フォーラム」での発表

▼活動の効果

100名を超える児童が下の川で毎年定期的に浄化活動や環境学習を行っておりますので、地域住民の川への関心や水環境の大切さの認識が高まっています。また活動や調査結果をまとめ「環境フォーラム」を開催し地域住民や児童、マスコミ等に発表し水環境保全を呼びかけました。これにより、参加者や地域に対して自然環境保全意識の高揚が図られています。

審査員から

「環境フォーラム」を実施するなど、外に向けた積極的な取り組みが行われており、波及効果に期待ができます。(F.Y)

▼苦勞した点・反省点

活動予定日や前日の降雨など、天候の影響を受け予定が変更となり、通常授業との日程調整に苦慮しました。

2時限通しでの活動でしたが、子供たちの探究心や好奇心が旺盛で学校との往復の時間確保もあり、1回当りの時間がもう少し取れば良かった。

沙流川と共生する街づくり活動

▼活動の目的

『沙流川と共生する街づくり活動』を目指して「第3回沙流川河畔林造成植樹活動」を実施しております。沙流川は一級河川で国土交通省の所管の河川です。北海道太平洋沿岸の河川のみに遡上する「シシャモ」は近年その漁獲量は減少し続けております。シシャモが河川に溯上して産卵するために必要な河川の環境を取り戻すために、河畔林を造成することは、河川の水質及び環境を良くし、魚類の遡上に良好な環境をつくり、鳥類及び動物が住みやすく豊かな流域が出来ると考えております。

▼活動の内容

「沙流川河畔林造成植樹活動」は今年で3回目の実施となります。地元日高町が公園設置箇所（サーモンパーク公園内）に植樹。エゾヤマザクラ10本、アカエゾマツ160本、ミズナラ30本、ブナ、イタヤカエデ30本 計230本を来賓4名(町長代理矢野助役、室蘭開発建設部苫小牧河川事務所及川所長、二風谷ダム管理所仲野所長、沙流川ダム建設事業所川村所長)沙流川愛クラブ会員21名、地元漁業組合女子部9名、一般6名、参加者計40名で植樹した。

▼活動の効果

河畔林造成植樹効果は永い年月が要するので、小規模でも継続することが大切であり、参加者が植林することの大切さと、環境の保全の大切さが再認識されたことと思えます。このことにより、益々沙流川流域の植樹の大切さを参加者に認識されることにより、一歩ずつ沙流川と共生する街づくりが進むものと期待をしております。

▼苦勞した点・反省点

- 1) 北海道の5月は植樹の最適な季節ではありますが、永い冬から春となり桜の季節が終わり、大変忙しい行楽の季節のために、参加者集めに苦勞をしております。
- 2) 各種の活動には、資金が要します。特に植樹には多くの資金を必要としますので、助成金を申請いたしました。当日まで決定が間に合わず資金調達に何時も苦勞をしております。今回の助成金決定に対し、大変厚くお礼を申し上げます。
- 3) この度は、資金不足より、会員及び事業体に「緑のオーナー」を募集して苗木を販売し、又家庭で余剰な植木を提供して頂き、現地に植樹をして、標柱に自分で好きな事を書いて立てました。
- 4) 「緑のオーナー」苗木販売代金 114本 ¥71,500は今後の植樹木の除草及び管理費に使用することにした。
- 5) 平成19年度以降の植樹地の適地がないため、今後の課題となっております。



植樹風景



沙流川愛クラブ
木本 勲 / 降幡 治男

植林活動から広がる交流の輪

▼活動の目的

平成14年より河川敷地に広葉樹(ミズナラ、ブナ)を清流維持及び洪水防止の目的で会員、地域住民が一顧となって毎年秋に緑豊かな森を目指し植林を行っています。

▼活動の内容

清流維持及び洪水防止には保水力のある広葉樹が適しているため今金町の森林に多く生息しているブナ、ミズナラを毎年、会員地域住民とともに植樹を行っています。また植樹後の育成管理として夏期には樹木の下草刈りを会員が行っています。



苗木に目印をつける作業



植え付け作業

▼活動の効果

植樹に参加された多くの方は、自ら苗木を植えたことにより樹木の生長と森林浴のすばらしさを感じ、次年度の植樹を楽しみに待っている人が多くいました。また参加者がお互い知り合い、交流の輪が広がっています。

▼苦勞した点・反省点

苦勞した点：植樹場所に苗木を運搬するに当たり、河川を渡る個所に橋がなく自分で運ぶことになったこと。
反省点等：植樹の参加者が多く、作業前に植樹の注意点を説明したが各自勝手に植えてしまったこと。

印旛沼の水草浄化と生態系の再生

▼活動の目的

印旛沼及び流れ込む河川・水路・調整池と印旛沼流域で生産している全ての市民に対して、親しめる清らかな水環境を再生するための「よみがえれ印旛沼」再生事業として、生物（植物・二枚貝）が持つ浄化能力を用いた手法による水環境改善を行なっています。

この環境保全された水路広場を小・中学生の体験環境教育の場としての活用を実施し、市民参加型の循環型社会を目指す「みどりの変革」の趣旨どおり、「とりもどそう！ふるさとの自然」環境づくりとして、印旛沼の再生を目指しています。



紙芝居：かっぱが人間と協力してアオコ退治

▼活動の効果

「とりもどそう！ふるさとの自然」環境づくりとして、印旛沼再生を目指して、心を共にする市民が集まり、活動を通じて、未来を担う子供達につり大会・水辺でのふれあい体験学習で、水生生物の育む水辺環境の大切さを伝える事が出来ました。

体験環境学習の実施に対して、講師に財 印旛沼環境基金・水生生物研究者・水路管理者（印旛沼土地改良区）・他NPO法人等の協力もあって、印旛沼全般の学習が組み込みました。

▼活動の内容

21世紀に求められている生物多様性による食物網を構築させる事が重要であり、食物連鎖が起きることで、生態系の安定化をもたらし、多様な水生生物の育むことで、窒素・リンの系外排除に寄与し、水質浄化に貢献しています。今年度は、この活動広場で小学生の体験環境学習を7月・8月に実施し、印旛沼についての学び、空芯菜種植、空芯菜刈り取り、釣り大会、水産試験場見学、ポンプ場見学などで、生き物の保護・保全の大切さを伝えました。11月24日（金）校内で印旛沼での学びの総合発表会を開催され、環境学習80時間を終了した。



アオコ観察

▼苦勞した点・反省点

[苦勞した点]
子供達の安全対策・トイレ問題

今年度は、関係機関の協力があり、けが人も無く順調に進める事が出来ました。

[反省点]
簡易トイレの設置準備不足

水辺はだれのものー自由と規律のある水辺ー



環境にやさしい乗り物



河川マナーの啓発活動



パンフレット

▼活動の目的

都市河川の水面や水辺の有効活用のあり方をカヌーやウォーキングを通して学び、これらの都市環境のあり方について地域住民の方々とともに考え、地域に向けて啓発していく。また、災害時にどのような場所から避難できるか、あるいは支障となるかを探り、水辺からの災害支援のあり方を啓発する。

▼活動の内容

日本橋川・神田川・隅田川のトライアングルをカヌーで巡り、水面から見た街づくりと環境について学ぶ。身体障害者等も手軽に水面のレクリエーションができるアクセスディンギーの紹介。電池ボートや屋形船を活用した観光と防災面での可能性の把握。水面利用者へのルール・マナー啓発。

▼活動の効果

一般の方々への都市河川の活用災害時等における船舶利用の可能性を実証
薄暗い都市河川でも水辺を楽しむことにより、地域の活性化が図られる
水面での利用マナーの大切さを一般の方々へ啓発できた

▼苦勞した点・反省点

一般の方々を対象としたため、PR不足
自治会等との緊密な協力体制の構築
船着場利用に関する理解不足と申請に時間を要すること
平日開催による帰宅困難者の候補となる就労者への実験

オホーツク、湧別川で遊ぶ・学ぶ・考える



水のきれい度調査

▼活動の目的

こども会議を通して湧別川の自然環境調査（水質調査・水生生物調査）を体験してもらい、湧別川を理解してもらおうとともに、川に親しみ、川の環境保全の大切さについて学んでもらった。また、調査結果をもとに湧別川をこれからどう守っていったらよいかなど、こども会議で話し合い、川に対する理解を深めた。

▼活動の内容

湧別川流域に住むこども達は、ふだん川に親しむ機会が少なく川の様子がわからないこども達ばかりであった。そこで下記内容を体験し、川に親しんでもらった。

川の様子を知る：川岸は自然のままか、人工的か、草や木が生えているか。

川の虫を知る：水の中で生活している虫を知る。

川の魚を知る：どんな魚がどのくらいいるか知る。

水のきれい度を知る：水の状況を調べる。パックテスト・水温・水生生物指標

調査結果をもとに湧別川のこれからについて話し合いを行った。



みんなで魚とり



水生昆虫の観察

▼活動の効果

流域の子ども達は、最近川で遊んだりする機会が減っているが、こども川会議で実際に川で自然環境調査を通じ、川に接し生き物を捕ったり、水にふれることで生き生きと楽しみ、新しい発見をしたようである。まだ、ふだん自分たちが利用している水がいろんな自然の仕組みによって川となっている。人の生活の影響で少し汚れた状況にあることも発見し、学習した。この川をいつまでもよい川であるように、ゴミを捨てない、汚い水を流さないことをこども達に意識づけるとともにいろんな機会を通じて、流域の人々に呼びかける機会となった。

▼苦勞した点・反省点

「川に学ぶ」活動事業開催の一週間前に流域に大雨が降り、川の自然環境調査場所を設定するのに苦勞した。増水により水量も多く、通常の状態での調査とならなかった。ただ当日は晴天に恵まれ、こども達が水にふれ、生き生きと遊んでくれたのが良かった。水質調査においても、いくつかの地点の水の調査とは異なったが、毎年調査し、データを残すことで川の状況を確認していくことが大切だと考えている。

源流から下流域まで、みんなで環境チェック



身近な川にこんな生き物がいるのにビックリ！



最近よく見られるハグロトンボ

▼活動の目的

侍従川の源流から下流域まで、定期的に生物調査(水棲生物・鳥・昆虫他)水質調査(温度・pH・COD・塩分濃度他)の実施調査を行い、環境のチェックをはかる。環境に異変があれば、原因を究明し、いち早く対策し環境保全につとめる。

▼活動の内容

- 1.平成18年6月4日 第3回身近な水環境の全国一斉調査への参加
- 2.毎月1回 侍従川定例調査(生物調査・水質調査)

▼活動の効果

侍従川の生き物を地域小学生に啓発するところできた。
侍従川の定例調査を通じて、川の状況把握ができた(生物・水質)。

▼苦労した点・反省点

<苦労した点>地域への活動PR及び活動参加者要請などで苦労した。
<反省点>地域住民への啓発活動が、思ったほど推進できなかった。来年度は「地域に親しまれる川づくり」の直接体験を通じて、自然環境の大切さを理解してもらおう。

審査員から

環境チェックによる原因究明は大変意義深く、今後も環境保全に努めていただきたい。(T.H)

人間と植物と動物との共生



導水路の建設



蛍の放流

▼活動の目的

小川に生息する小動物や水生植物等の生態系の連鎖を学習するとともに、幼い子供たちから高齢者の人々までの世代を超えた交流が出来る機会を提供し、地域の連帯を目指す。

▼活動の内容

小川の維持管理を継続的な活動の基幹とし、草花を主とした環境整備を行う。また、蛍が飛び交う小川にすることを目標にして、卵の孵化・カワニナの繁殖・幼虫の放流を行う。本年度は、流水量を増やすことにより夏場の水温上昇が押えられ蛍の孵化に成功。

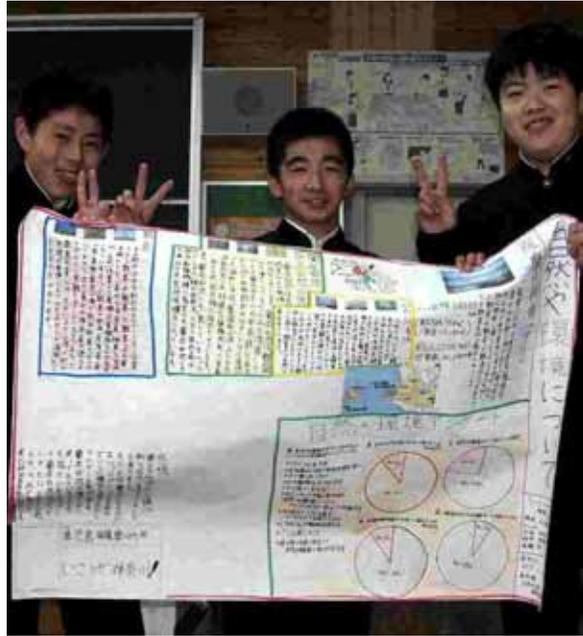
▼活動の効果

行事の有無にかかわらず毎月第一日曜日を現地集会の日と定めて、地域の多くの人々が集まった。「蛍」をテーマにした環境整備を行ったことにより人々の関心が寄せられ、年間を通して散策する人数が増えた。

▼苦労した点・反省点

一部の人の誤解から「せせらぎ」に生息する小魚が親子連れに採られてしまい、看板を立てて注意を喚起することとなった。また、利根川本流に飛来する「川鵜」の餌食になり小魚が絶滅寸前になってしまった。生態系の自然な状態にしておくか、人間にとって都合の良い状態を維持するべきか、意見が分かれるところであり、会の基本方針を再度協議する必要がある。また、蛍の幼虫の購入は出来る限り少なくして、現地での孵化数を増やし人間の手を加えない自然な状態での蛍の繁殖を目指す。

桶脇川の環境調査と水族館との連携



「子どもエコクラブ」の新聞コンクールに応募

▼活動の目的

町の中央を横切り、学校の脇を流れる身近な桶脇川の水質・生物調査を行うことで、観察の方法や視点、器具や薬品の使い方のスキルを身につけさせたい。また、実際に観察や生物を捕獲することで関心を高めると共に、水槽や池で飼育することも合わせてその生態を詳しく知る手がかりとしたい。そして、清掃活動を兼ねたゴミ調査を行うことにより、現状を知ると共に環境を大切にする心と地域やそこに住む生物を慈しむ心を養いたい。さらに、これらを報告することで他の生徒や地域の方々にも同様な意識付けをしていきたい。調査したことは各種団体に送るとともに、壁新聞にまとめてコンクール等にも出品し評価していただくことで、客観的な思考も育成できるように図りたい。また水族館(福岡マリンワールド)と携帯電話FOMA(以下FOMA)を使って遠隔授業を行い、専門の学芸員に授業をして頂くことにより、興味関心を高めるだけでなく知識・技能を深めより専門的な活動を行うことで、環境を守るためのエキスパートとして他の生徒だけでなく地域全体を担う役割を果たせるようにしたい。

▼活動の内容

下記の事について、定期的に継続して調査を行った。

- 桶脇川の状態 幅、深さ、流れの速さ、川底の状態など
- 水質 透明度、におい、温度、pH、ORP、電導率、COD、NO₂、リン酸
- 生物 種類、数、場所など
- 飼育 捕獲した生物を水槽や池で飼育、観察
- ゴミ 数や量、種類、地域の清掃活動への参加など
- 清掃活動 で調査し記録をとったものを集め分別処理
- 地域との活動 地域で行われる川を中心とする行事、活動への参加、援助
- 報告 県の委託の水生生物による水質調査、子供エコクラブへの壁新聞提出、文化祭の発表や調査結果の掲示
- 水族館との学習 FOMAを使いマリンワールドと遠隔授業を行う。そして実際に学校にも来られて、選択理科の授業と講演もしていただく。



水族館からの遠隔授業



生物を捕獲して観察



きれいな川であると確認できた

▼活動の効果

自然の変化を調べるため、事前調査として、お年寄りなどに昔の川の様子、生物の捕獲の方法などをインタビューすることによる交流ができた。

川を中心とする清掃活動により環境への意識が高まった。

調査・研究したことを文化祭や壁新聞の作成と掲示による研究の報告することにより、他の生徒の環境への意識も高まった。

市・県の環境関係・河川局やエコクラブなどの環境団体へ、活動・調査報告ができた。

調査の方法や器具、薬品の使い方、飼育などのスキルが高まった。

遠隔授業により学習に対する生徒の意識が高まると共に、専門的な知識を高められた。また学校に来ていただくことで全校生徒にも広げることができた。

審査員から

携帯電話を用いた遠隔授業など新しい取り組みが行われており、今後の発展に期待が出来ます。
(F・Y)

▼苦勞した点・反省点

35名の生徒に対して指導者が少なく、十分な対応ができないこともあった。

普通は選択理科の授業で活動したが、準備や後始末、行き帰りの時間の関係もあり1時間の授業の中では観察・調査の時間が限られたり、十分なまとめや考察ができないことが多かった。

上・下流域のもっと広い範囲や近隣の他の川での調査・観察も行い、その結果を比較する活動も行いたかった。

遠隔授業は生徒の学習に関してはとても有効なので、より多くの機会をもつとともに、いろいろな種類の講師の方と交流ができるように図りたい。

私たちの出来る行動から始めよう！



引越し作業

▼活動の目的

ホタルは水、緑（植物）、空気（空間）、土などの環境条件が、ほどよく調和した「自然」の中でのみ生きられる生き物です。そして、そのような自然には水生、陸生を問わず多様な生物が棲みつき、豊かで安定した生態系が確立されています。人間も自然の一員です。つまり、私たち「ホタルの会」は、身近に生きるホタルの生活を見つめることで、人間にとって好ましい自然環境とは何か、人間が安心して暮らせる自然とは何かを考えることにしました。そして、そのような自然環境の保全・再生のために、私たちの出来る行動から始めることを目的とします。

▼活動の内容

ホタルを通して自然保護の啓蒙活動を行う。（「ホタルフリートーク」と名付けた水環境問題に関する自由討論会の開催・ホタル保護団体交流会を主催し水辺環境を守るための連携を強化）

ホタル生息地の保全・整備活動（湯福川、岩倉沢川の草刈りや植樹・清掃）

ホタル観察会や勉強会の実施（長野市主催水辺観察会・PTA・育成会・公民館・自然保護センターなどと連携した勉強会や観察会の実施）

定点観測（長野市内10数カ所ので個体数を観測し現状把握）



八幡川植樹祭：150人で汗を流した



総会のフリートークで解決の糸口を模索した

▼活動の効果

参加団体のさまざまな取り組み、悩み、アイデアを出し合い、一緒に考えることで、活動の参考となることが多くあった。県内の情報を交換し連携することで環境保全の輪が広がった。

ホタル生息地に手を加えることで、ホタルの生息に適した環境の一部が整い、発生が持続している。

身近な場所にホタルが生息していることを市民に理解して頂き、環境保護の大切さを理解して頂いた。また、次世代を担う子供たちの関心を高めることができた。

観測は平成5年から実施している。気温、水温、個体数を観測することでこれらの関連性がわかるほか、個体数の変化が確認できる。長く継続することでデータの重要性が高まってきた。

▼苦勞した点・反省点

関連団体を取りまとめる幹事団体及び人材の確保が近々の課題であるが、当会が軌道にのるまで運営するため、作業が増えている。

同じ参加者が多いことから要領よく作業できる反面、大勢の人に参加して頂き活動を広げたい。

地元住民の理解や地方事務所の担当者の理解を得るための調整作業が困難であった。

長く継続するための後継者確保が困難である。

環境学習五ヶ瀬蘇陽峡中山ダムカヌー教室



カヌー漕行の説明

▼活動の目的

五ヶ瀬川の上流域に暮らす子供たちに、身近にある川を利用して、専門的知識を持った指導者のもと、遊び、学ぶ事で、川の大切さ・素晴らしさを再発見し、郷土を愛する心・郷土の美しい川を誇りに思う心を育てる。

▼活動の内容

PFD（ライフジャケット）を着用し、準備体操。2班に分かれ、1班はカヌー教室。パドルの使い方、乗艇、降艇の仕方、バランスのとり方などのレッスン後、穏やかな流れの中で実践練習。

もう1班は、リバーレスキュー。浅瀬の歩き方、流れの中での流され方、泳ぎ方、救助ロープを使ったレスキュー法などを練習して、実践、プチリバートレッキング（川を上流に歩きあがっていく）。途中で班を交代する。



救助ロープを使ったレスキュー法



とても楽しかった川とのふれあい

▼活動の効果

子ども達がカヌーを使って川で遊んだり、実際に川の中に飛び込んで水に触れる事で、川の現状を身をもって体感する事ができた。それにより、今後のより良い川づくり、町づくりに寄与する事が期待できる。

また、昨年の台風の災害後の河川工事中で、工事中は水が濁ってしまうが、地元の工事の会社の方がカヌースクール中の工事を一時中断してくださったり、地域の大人の方々も川で遊ぶ子ども達の姿を見学したりと、地元の川への関心が深まると考えられる。

▼苦労した点・反省点

昨年の反省点より、体温低下を防ぐ為、河原での焚火は効果的であった。天候不順で日程を決める事が一番苦労する点である。天候は良かったが河川の水位の上昇の為、学校のプールで行う事があった。プールは静水で流れがない状態のため説明は難しいものであったが、反対に河川の水位が上がっている危険な状態である事を現実的に説明でき、良かった点でもある。

葉山川の自然の大切さを学ぶ場づくり



めだか池で魚放流会



知事も草津塾の展示や魚たちを熱心に見てくださった

▼活動の目的

葉山川流域での水質測定、自然観察(鳥、蝶類、水生生物、植物)を通じて、流域の自然の実態把握と情報発信及び自然環境保全に向け、行政等へフィードバックする。

流域の小学校、地域協働合校等との協働学習を通じて、子ども達が自然体験の面白さ、川に対する愛着心と自然保護の大切さを学ぶ場づくりを行なう。

他の活動団体とのコラボレートにより、活動の輪の拡がりや自然環境保全への大きなうねりをつくる。

▼活動の内容

葉山川での毎月の水質測定、流域の自然観察(鳥、蝶類、魚、植物、景観等)、及び葉山川での毎月の美化活動(立命館の学生等も参加)等を実施

流域の小学校での環境学習の支援(魚捕り、学区内でのめだか生息調査、炭焼き、炭を使った水浄化学習、植物観察会等々、学校のエコスクール支援委員として学習企画にも参画等)

地域協働合校と協働し、メダカ池の整備、子ども達のめだか放流会等を実施

他の活動団体との協働、数多くの活動展示会等に積極的に参加



熱心に説明をきく
子どもたち



めだか探し学習



水質浄化実験

▼活動の効果

葉山川の水質分析ではCODの悪化傾向が認められ、これらの情報発信により、行政また活動団体からも注目されるようになってきた。

流域の小学校の継続した環境学習支援により、子ども達と仲良しになれたこと、小学校の先生達の信頼も得て、学校のエコスクール支援委員会にも参画し、学校側と一体になった環境学習が出来るようになってきた。

琵琶湖・淀川流域圏の交流会組織立上への参画、また地域協働合校等との協働、機会毎の活動団体との協働から、草津塾の活動を認められ、多方面からの支援も得られるようになった。

▼苦勞した点・反省点

特に、苦勞したと言う思いはないが、活動が広範囲になると、活動メンバー不足を痛感する。不足時は、別の活動で懇意にしている人達に支援要請したり、また近くの立命館大学ボランティアセンターに支援要請等を行なっている。今後は多くの活動団体等とのコラボ、また地域コミュニティの人達を巻き込んだ形で活動に展開してゆきたい。

草津塾

大津 寿男 / 田中 俊雄

Tanaka-toshio@muf.biglobe.ne.jp

http://npo-oumi.net/JUKU/

ホタルの保全活動が生んだ連携の輪



カワナ調査終了後の
集合写真

▼活動の目的

1. 長期的な目的（意図）
女鳥羽川のホタルの里をビオトープとして保全したい。同エリアを松本市の教育資源としていかしたい。同エリアの管理のあり方について、以上の2点と利治水との両面の調和がはかれるよう提言したい。
2. 平成18年度の活動の目的（意図）
ゲンジボタルが比較的多く見られる洞橋地区と、そこから約1 km下流に位置する長寿橋地区の環境の比較調査を行い、洞地域のホタルの安定化のためにも、下流側への生息エリア拡大に結びつく知見を得たいと意図した。

▼活動の内容

- 調査は3段階に区分した。
- 第1学期：6月中旬～7月中旬に両地区のゲンジボタル出現数を調べた。夜間の河畔を歩いた印象も出し合った。
 - 第2学期：8月～9月にかけて、カワナノの生息分布を調べた。河川内を歩いた印象も出し合った。
 - 第3学期：11月に洞橋地区のカワナノ生息地を再度調べ、その増減などを見た。また、河川構造物の影響や、周囲の水田・山林等の影響も見ながら調査全体のまとめをした。

▼活動の効果

地元の地域の皆さんと協力するため「女鳥羽川のホタルの里を守る会」を呼びかけ、その結成を実現できた。そのため、この会に参加して下さった地元農事組合、浅間温泉ホタルの会、信州大学の先生と学生さんらと一緒にこの調査活動をすすめることができた。

実際に調査で分かったことは大変少ないが、この調査活動を通じ、こうした方々と手をつなぐことができた意味は大きい。これからは、この輪をさらに広げながら、少しずつ長期の目標を目指して行きたい。

▼苦勞した点・反省点

1. 6月から約半年間の現地調査では不十分である。春にはゲンジボタルの幼虫も大きく育ち確認しやすくなるので、3月～4月にも調査を行いたい。
2. 長寿橋地区は、川幅が大変広く、河川敷の草丈も高く歩きにくくて、調査が難しかった。カワナも少ないため、ついに生息を確認できなかったことが残念。
3. 洞橋地区は、カワナをかなり確認できたが、その場所を公表することは大変悩む。

地域に根つきつつある環境学習



明星大学理工学部との連携学習



プランクトンの観察

▼活動の目的

教育活動...川について総合的（生活、理科、社会）に学習する。児童が地域の自然（浅川の環境）に関心と理解をもち、郷土の自然への愛着と環境全体に対する認識を深める。

地域啓発...水辺の楽校運営委員会を中心に生まれた地域の会「浅川っ子の会」を中心に、地域の方々に豊かな川の自然を味わわせ、川に興味関心を抱いてもらい、環境保護への意識を啓発する。

▼活動の内容

教育活動...各学年のカリキュラムに基づき浅川を学習の場として活動。川に親しみ、川の生物と環境との関係を理解させる。

川の自然環境をよりよいものにしていく自然環境保護活動への意欲や能力を育てる。

地域啓発...川清掃（地域清掃日や学習時間の行き帰り）を通して、川への関心を高める。

川で楽しむ活動（魚とりや野鳥観察会など）を企画運営して川の環境をより身近なものとして生活に受け入れてもらい郷土の自然景観の保全に努める。

▼活動の効果

教育活動...川の自然に興味関心が高まり、学習活動により知識を得る場としての認識が深まっている。そのため、川の環境を大切にしていこうとする児童が増えている。

地域啓発...ワンドを申請した当時の6年生（現高校生）やその保護者などの参加により、継続した活動として地域に根つきつつある。

審査員から

小学校での川についての教育活動が継続することで、卒業生やその父兄を通じて地域へ広がりがあつたり、今後に期待がもてます。（D・Y）

▼苦勞した点・反省点

教育活動...天候に左右される活動のため、活動時間を他の教科との差し替えるなど時間割実施上の課題や困難がある。

地域啓発...地域自治会、行政などとの連携を進めているが、まだ広がりかけるところがあり、今後一層の啓発活動が必要である。

日野市立滝合小学校

太田 由紀夫 / 高橋 健

<http://www.city.hino.tokyo.jp/school/takiaie/>

広げよう海の森・育てよう汽水域の生物たち



億首川の水生物調査

▼活動の目的

活動拠点うるま市州崎マングローブテラスは市街地の人口干潟。中城湾内を出島方式で埋め立て、海川敷きに幅3m、長さ約1kmのマングローブ植栽地です。かつての干潟は、貝やエビ、カニや魚の豊富など、地域の暮らしを支える貴重な干潟でした。現在テラスには、メヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、ヒルギダマシ、ヒルギモドキと5種のマングローブビオトープが広がり、近隣校の「環境教育の場」に活用されていますが、地域住民の干潟ばなれ、ポイ捨てゴミ、漂着ゴミがあとを絶たず、生態系の保全活動が急務になっています。今回は地域の公民館や児童センター、学童クラブに呼びかけ、小中学生と住民を巻き込んでマングローブウォッチングや植樹を通して、水辺環境の保全・再生を目的に実践してきました。また、学校や地域のニーズに応えて多くの人たちと共に活動の輪を広げるよう積極的に支援活動も実施。

▼活動の内容

- 1) マングローブの育苗団体の募集
- 2) 応募した団体(11団体)への出前講座の実施(マングローブって何?なぜ大切な?育苗は何に役立つの?)
- 3) 各団体が育苗実習と観察実践(4ヶ月間)
- 4) マングローブウォッチング1(種の見分け方)
- 5) マングローブウォッチング2(生き物しらべ)
- 6) 河川の水生物調査(億首川、天仁屋川)
- 7) 体験活動「環境学習」発表会の実施



メヒルギの植栽
「カニさんたちがたくさん来ますように」



水生生物調査

▼活動の効果

児童館や公民館、児童センターなどの公共施設で、牛乳パックを育苗ポットに活用して、メヒルギの胎生種子を育てて貰った。施設を訪れる地域住民がマングローブを知るよい機会となった。子どもたちが育苗・観察を通して、訪れる大人たちに説明したり、関心も深くなった。小中学校から、「環境学習」の要請も増え、「総合的な学習の時間」での公演、マングローブ生態調査や、河川の水生生物調査など支援活動が広がるようになった。体験活動・環境学習発表会では、「体験」「記録」「まとめ」「発表」の学習スタイルをふまえ、地域の大人と子どもたちの協同作業がみのり、素晴らしい力を発揮することができた。

審査員から

マングローブ植栽など小中学校と住民との共同作業を通じ水辺環境を理解してもらい、その保全・再生が進むといいですね。(M・M)

▼苦勞した点・反省点

夏になると沖縄は台風の道。マングローブウォッチングの日に2度も台風に見舞われ、延期通知や参加団体の変更や講師の変更と大騒ぎでした。また、二学期制が導入されていると知らず、8月末日まで夏休みと思い込み、8月後半の平日に「発表会」を実施したため、参加団体が減った事である。

身近な川とふれあう機会づくり



箱めがねで観察

▼活動の目的

逗子市内を流れる田越川は、支流である久木川、池子川も含めて、市民にとって身近な川であるが、その現状は誰も把握できていない。まず、現在田越川にくらす魚を調査して、過去（1973年、1991年）の調査との比較などから、田越川の現状を把握する。

同時に、逗子市民向けの観察会を実施し、身近な川とふれあう機会を設けることで、田越川が、多様な生き物がくらす場所であることを実感してもらおう。



▼活動の内容

「田越川さかな調査」として、2006年4月～10月の期間に、田越川、久木川、池子川、池子大池、久木大池、名越溜池にそれぞれ数箇所の調査地点を設定して魚類の捕獲調査を実施。調査結果については、横須賀市博研報として発表を準備中。逗子市民向けの「田越川さかな観察会」を4回予定し3回実施した（1回は荒天のため中止）。実際に川の中に入り、箱めがねで生き物のくらしぶりを観察してもらったり、網を使って生き物を捕まえる体験を通して、多様な生き物の存在とそのくらしぶりを実感してもらったことを心がけた。

また、観察会の事前準備として、「田越川さかな観察会」を運営する仲間（市民）を募集するために、公開講座として「網の使い方講習会」を実施した。



とった生き物を解説中



みんなで網に追い込む

▼活動の効果

「田越川さかな調査」から田越川の魚類相を把握することができた。ホトケドジョウ、メダカが存在は確認することができなかった一方、過去には確認されていない種類の魚を確認することもできた。また、外来魚のいない健全なため池の存在や、アユの継続した生息を確認できた。この調査結果から、『田越川さかな図鑑（簡易版）』を作成し、市民への配布を行った。

「田越川さかな観察会」に参加した多くの方は、田越川でくらす生き物の存在とその種類の多さに驚いていた。また、地元中学校で、「田越川さかな調査」の結果を報告する機会を頂き、まだまだ十分ではないが、市民が田越川にくらす生き物を実感する機会を設定できた。

▼苦勞した点・反省点

観察会の対象者を広く一般とした上で、子供を主役とした観察会を行うつもりであったが、関心の高い大人の参加者と、子供の参加者、両方が満足できる内容にするのは少し難しかった。質疑などは、どうしても大人向けの内容になりがちであった。

活動広報が十分できておらず、まだ活動そのものを知らない市民が多い。



ホタルの舞う小川づくり



自然材料を使った土水路整備



整備後のようす

▼活動の目的

調査対象水路は上流部にため池をもつ農業用水路であり、一部を水生生物が安定して生息できる小川に再生する活動である。以前には身近に観察することができたメダカやタナゴ、ホタルの棲める水辺環境を再生し、地域の子供たちに自然観察の場を提供し、環境マインドの醸成を図ることを目的としている。

▼活動の内容

本活動は、上流部にため池をもつ農業用水路を魚やホタルが生息可能な小川に再生する活動である。土水路を自然素材により整備し、水生生物が安定して生息できる小川整備を行った。本整備は、地域住民との協力により実施した。整備後にカワニナ、ドジョウ、ヨシノボリ等の放流事業を小学生、高専生、地域住民と協力して実施した。小川の継続的な保全活動は、地域の小学生・住民との協力体制で行うこととしている。



水路の説明を聞く生徒たち



魚の放流

▼活動の効果

小学校の総合学習の時間と連携した活動として実施した。子供たちに身近な水辺に棲む生き物について学習する機会を提供し、生息環境への関心を持ってもらうことができた。また、簡単な水質試験を行ったことで、水の汚れについて学ぶことができた。地域の水辺環境作りを、小学校、高専、地域が協力して行うことができた。来年の夏にホタルが舞うのを期待しながら、継続的に小川整備と観察を行うこととしている。本小川が子供たちの生き物観察フィールドとして定着するよう見守っていきたい。

▼苦勞した点・反省点

小川作りに対する地域の協力・理解を得ることができたことは大変ありがたかった。

上流部の溜池にはブラックバスが生息していることから、水を抜く時期に駆除をすることを考えている。外来種の駆除には時間がかかるが、根気強く行うことにしている。ホタル、メダカ等の魚を生息させるためには、外来種の駆除など多くの課題があることがわかった。活動を通して参加者各自が多くのことを学ぶことができました。

映像で伝える紙屋川の風景と歩み



北野天満宮敷地内での紙屋川撮影



黒谷川の水を利用した紙漉き場

▼活動の目的

今回、小学校高学年を対象とした、地域教育用映像教材の製作において、京都でもあまり知られていない紙屋川の歴史と役割、そして現在の風景を子供達に紹介し、それによって子供達が川と人の関係や自然について興味を持ってもらうきっかけになれば、という思いを込めてこの作品をつくりました。

▼活動の内容

京都の街中をひっそりと流れる紙屋川の歴史や現在の風景を、多くの子供達に紹介することを目的に、この映像教材を製作。川の流れや、紙漉きの現場などの水の光などを上手く映像に取り組むべく、機材はH D Vを利用した。

完成した作品は京都市視聴覚センターにアーカイブ化し、市内の小学校における、地域学習の時間に補助教材として使われることになっている。



平安時代、紙屋川の水を使って和紙がつけられたと言われている

▼活動の効果

来春には、京都視聴覚センターにて教材目録に登録され、市内の小学校に貸し出しをされます。また、今回は京都市内の小学校の先生方に試写してもらい、どのようにすれば子供達に見やすく、また丁寧に紹介できるかを意見交換することが出来ました。

▼苦労した点・反省点

映像を製作するにあたり、子供達が飽きないように川を効果的に映像化するのが難しく、構成を練るのに苦労しました。また、字幕の大きさや、ナレーションの言葉の口調、一つ一つの単語なども現場の先生方と相談して、調整していきました。撮影時では、黒谷川で和紙作りをしておられる職人さんたちの撮影をするときも、水の綺麗さや質感を出すことに苦労しました。



完成DVD

川島大囲堤外の5河川敷はエコミュージアム

NPO 川島ネイチャークラブ



ビオトープ出前講座

▼活動の目的

川島ネイチャークラブの目的は、川島町の自然環境保全や自然環境学習などの事業を行い、人が安全に川や自然と触れ合える自然環境づくりや自然循環型地域社会の活性化と発展に寄与することを目的にしている。具体的には、地域との交流を図りながら、地域全体で楽しみ親しめる川づくりや幅広い自然体験活動を行うことです。

▼活動の内容

子どもの健全育成を図る活動として、地域子ども教室を開催し、河川の自然観察会を行った（川島町生涯学習課と協力）。

環境の保全を図る活動として、三つ又沼ビオトープの保全活動（ハチク林拡大抑制作業）と自然観察会を行った。また、荒川クリーン作戦（荒川上流河川事務所）に参加して、河川に散乱しているゴミ拾いを行い、河川環境美化活動を行った。



自然観察会



堤防を歩く

▼活動の効果

地域子ども教室での、河川の自然観察会（主に越辺川で活動）は、「自然観察会に出かけて、ナチュラルリッ子になるう！」を年間テーマに掲げて、年会員20名の伊草小学校児童を対象に、年12回の自然観察会を開催した。平均出席率は73%で、参加した子どもや保護者から大変喜ばれた。

三つ又沼ビオトープ保全活動では、ハチク林の拡大抑制を検討し、新たな手法として、伐採した後のタケの株割り（ナタ使用）が効果的であることを確認した。（三つ又沼ビオトープ保全ミーティングで報告）

荒川クリーン作戦参加は毎年参加しているが、19年度は、川島ネイチャークラブ主催で、越辺川クリーン作戦を開催計画中。（荒川上流河川事務所、川島町、公民館、町民、NPOとの連携）

▼苦勞した点・反省点

毎月の地域子ども教室開催事業は、当法人に対する期待とエネルギー負荷が大きかったが、荒川上流河川事務所、川島町、自然関連機関、保護者、一般ボランティアの協力（総計72名）によって無事終了できた。そして、（財）リバーフロント整備センター様のご支援を心からお礼申し上げます。

水辺利用と環境調査から川の恵みを語り継ぐ



石についている水生生物の採取

▼活動の目的

上流に広域上水道の水源である浅瀬石川ダムがあり、恵まれた自然と豊富な水資源を地域の個性として活かした地域づくりを推進するに当たって、環境保全に対する意識の高揚と活動の参加を広げる。学校と地域が連携した水質調査や水辺の利用など、「浅瀬石川に学ぶ」体験活動を通して、水資源と流域として水質の浄化と景観と環境保全の地域づくりの実現を目指す。

▼活動の内容

水生生物から見た水質調査や植生分布観察から、周辺環境と汚染の要因や生活廃水が自然環境の変化をもたらす影響を探り、自然の保護・再生と地域住民の日常的な環境保全への理解を広げ、活動の継続と拡大の必要性を確認した。

水質調査（水生生物から見た水質調査...小学生）

生物調査（植生分布観察）

環境保全活動（生活廃水流入箇所点検、ヤマメの稚魚放流会）

水辺の楽校（釣り体験、いも煮会、民話のモニュメント見学話し合い）

その他（カメラウォッチング、図画作文展示会）



ヤマメさん元気に育ってね



浅瀬石川クリーン運動を広げる図画・作文

▼活動の効果

参加した幼稚園児と小学生は、水生生物調査や稚魚放流会の体験を通して、きれいな水に育つ生き物や魚の姿から、川にゴミを捨てないこと、水を汚さないことなど、川と水を大切にすることを学び、家族で話し合いすることに繋がっている。釣り体験といも煮会では、川の恵みと身近な活動の場になることを親子で体験し、川と流域の集落到伝わる民話が語られ、生活廃水流入箇所から家庭排水の改良が話題になるなど、「川に学ぶ」活動の新たな継続課題も出された。新年の集いで活動報告と展示をし、参加者の学習から地域住民の理解が広がった。

▼苦勞した点・反省点

浅瀬石川クリーン作戦、調査・観察、稚魚放流、釣り体験・いも煮会等、年間計画の日程とスタッフ調整。幼稚園・小学校、漁業協同組合など協力団体との協議。助成金が事業報告（支払い完了）の後になることから経費の立替に苦勞した。学習や活動ごとのリーダー育成と、川が好きで年間を通して実践参加する里親のような活動の核となるグループ作りを進めたい。

子供と学び楽しむ有栖川・水と生物観察会



お父さんと一緒に生き物採取

▼活動の目的

1 有栖川の水質調査

有栖川の最下流部・南橋とそこから上流約4キロ地点の北嵯峨高校前においてパックテストと水生昆虫調査を実施し両地点の水質と河川環境を比較検討する。

2 身近な川を知り、川に学び、川を守ることの大切さを学ぶ

学区内を流れる有栖川の現状を知り、関心を高め、川を守ることの大切さを学ぶ。川の中の生き物や漁法などについて楽しく遊びながら学ぶ。

瀬や淵、滝つぼなど多様な川の形状、水質、流速などと生き物との相関関係を学ぶ。

3 地域と家庭、多世代間の交流の場を提供

学校、地域、親と子供、子ども達どうしがふれあう場づくりを提供。

高校生の指導を得ながら、小学生に調査方法やまとめ方を学んでもらう場を提供。

▼活動の内容

北嵯峨高校生物部と小学生、保護者が6班に別れて有栖川の最下流部と中流部の2地点で水質調査を実施。調査内容はパックテスト、水生生物の観察、流速、水のおいなど。

パックテストはpH、COD、亜硝酸性窒素の3種について参加者全員が実施。

指標水生生物の観察は生物部の班長を中心に石や岩に付着している昆虫を採集し、分類・同定・数量などを記録。

淵の深みで投網を打ち、コイやオイカワ、ギギなど捕獲し撮影して放流。

午後からは生物部顧問の木戸先生に「森と里と海のつながり」のお話を聞いた後、調査結果を班ごとに整理し、2地点の水質結果をまとめ、班ごとに感想会。

調査結果は最下流の南橋はコガタシマトビケラ、スジエビが多く「きたない水」、高校前はヒラタカゲロウ、カワニナなどが多く「少しきたない」という判定ができました。



見事に投網を投げられました



このお魚はこれですよ



水質調査の感想発表会

▼活動の効果

地元高校生と小学生、地域との連携による「川に学ぶ」体験活動は、普段一緒になることの少ない地域の人にとっても楽しく貴重な体験でした。勿論参加者全員が有栖川の河川環境へ関心を高めることにもなりました。

審査員から

高校生、小学生、地域との連携による川での体験活動を継続することで、河川環境へ関心がますます深まるといいですね。(M・M)

▼苦勞した点・反省点

当初、7月22日(土)に予定していたが、長雨の影響により止む無く延期。このため中止と延期の周知徹底を図る上で相当な労力がいった。

夏の盛夏、幼児、小学生とともに2地点の水質を一日で調査し比較検討をするというタイムテーブルはかなりハードであり、閉会も予定より約40分遅れてしまった。

環境保全を通じたネットワークづくり



生物の先生の解説



水質調査の風景

▼活動の目的

和泉川は、区内の湧水を集めて流れる2級河川で、平成3年に「ふるさとの川モデル事業」の認定を受け、約60億を投入して平成18年に完成しました。河道整備として瀬・淵・州・河原など河川形態を創出し、5つの水辺拠点を整備して自然とふれあう空間を創っています。平成18年には「土木学会デザイン賞2005最優秀賞」「環境保全功労者表彰」を受賞しました。この流域の環境保全活動に11グループが取り組んでいます。本活動は、湧水地を中心に活動を取り組みながらホタルの里づくり構想の拠点とした環境整備を通じて、グループ間が横断的・有機的に連携できる雰囲気づくりの役割の一端を担うことを目的に活動しています。

▼活動の内容

湧水地並びに周辺の整備と三角堰の設置
和泉川流域のホタル生息地としての踏査
川並びに水辺周辺の生物・植物・水質・歴史の調査
活動成果の発表会の開催（パネル展示・発表会）
屋敷林・湧水地を訪ねて古老から学ぶ



古老から川・街道の歴史を学ぶ



調査結果の発表会

▼活動の効果

1ヶ所の湧水地域はホタル生息地の整備が完了しカワニナを放流した。

これを契機にほたるの里づくりの第1歩を踏み出すことができた。

湧水箇所・史跡がある宅地内を児童に開放していただいた。

11グループのネットワークづくりの切り口となることができた。

地域の水・緑の自然環境にかかわるPR用資料が蓄積されてきた。

地域・学校・活動団体間の連携が密になったこと。

▼苦勞した点・反省点

「ふるさとの川モデル事業」となった2.8kmの流域には、11グループが活動を展開することになりましたが、相互の信頼関係の確立・連携を図ったネットワークづくり。

人とひと・人と自然とのふれあいを通じた地域の自然環境を守り・育てて次の世代に引き継ぐには、人間の「こころ」づくりが必要である、こんな思いを痛感しています。

地域に残されている自然は、多くの先人が艱難辛苦に耐えながら守り・育ててきたことを謙虚に学びながら、次の世代に引き継ぎたいと願っています。

審査委員から

環境保全活動を通じ、各団体のネットワーク化が図れ、将来性に期待できる。(T・H)

地域の風土に触れ人々と交流する自然体験



ボート体験



地引網

▼活動の目的

小学生親子を対象とした自然体験活動を行い、地域の風土と生活に触れ地域の人々と交流することで、青少年の健全育成・親子のコミュニケーション促進・高齢者との交流・地域への愛着を持つ等、様々な問題解決に寄与する。

▼活動の効果

1については、周辺にかんがい用の取水堰や樹木が生い茂る中洲があるため、堰の利用方法や中洲に生息する野鳥について理解を深めてもらった。また、以前ボート屋が営業を行っていた場所なので、参加者の中には昔を懐かしむ方が多く、子どもに当時の様子を教えている姿が見られた。

2については、自ら魚を捕り・触れ・命をいただくという貴重な体験になったほか、地域の成り立ちや周辺環境についての理解を深めてもらった。

どちらも地域の町内会、NPOの協力を得て行った。自分の愛する地域に多くの人に来て楽しんでもらったこと、そして交流ができ有意義だったとの感想をいただいた。

▼活動の内容

1.ボート体験 名取川水系広瀬川を会場にEボート体験を実施。Eボートの組み立てのワークショップのほか、安全用具の付け方、ボートのこぎ方、船上からの生き物の観察を行った。参加者数70名（スタッフを除く）

2.地引網と運河舟運 名取川河口部を会場に地引網と運河舟運を実施。河口での地引網のほか、捕れた生き物の観察、貞山運河の舟運、地域の歴史・文化講座、海浜植物の観察を行った。参加者数20名（スタッフを除く）

▼苦労した点・反省点

荒天による中止や延期の判断が難しかった。田植えは延期にすると農家の方へ迷惑がかかるためやむなく中止。地引網は網元との相談で延期にしたが、日程変更により参加者が減少した。どちらもやてできない天候ではなかったが、安全を第一に考えた場合そうせざるを得なかった。雨天でも十分に楽しんでもらえるような代替プログラムが必要であると感じた。

阿武隈川源流水質調査とステップアップ講座



採取した水生生物の同定



水生生物の特徴についての講義

▼活動の目的

小中学校の環境学習の支援を行なう上で、環境省、国交省編「川の生きものを調べよう」を利用しているが、当水域においてはその指標生物では困難なことがある。そこで専門家の同定方法の指導を受け、より地域に適した学習支援を行なうことを目的とする。（同定は、水生昆虫の同定が主である）

▼活動の内容

環境学習を支援する指導者のレベルアップをはかるため、専門家を招いて水生生物（主に昆虫）の同定方法を学ぶ、実践的学習会を開催した。（川で水生生物を採取し同定する。）

▼活動の効果

参加した教員のなかで2校が水生生物による水質調査を行った。

一般参加者も水生生物による水質調査や環境学習の支援を活発に行った。

西郷くらしの会の会員はすでに環境学習支援を行っていたが、よりくわしく子供達へ指導ができるようになった。（同定数が多くなった。）

地方新聞に掲載された。

▼苦労した点・反省点

水生昆虫の同定は顕微鏡下でなくては不可能な事が多く、よりくわしい同定を可能にするためには、顕微鏡1台（1台は借用）では困難であった。又、何回も繰返し学習会を行わないと確実な判定（同定）はできない。少人数で行わないと確実な知識にならないこともある。

地域との連携による桐生川の愛護活動



理科の授業で冬の川の様子を学習

▼活動の目的

環境や環境問題に関心を持ち、環境に対する人間の責任と役割について理解し、環境保全のために積極的に行動する態度や環境問題解決のための能力を育成する。

川に親しみ、川を通して学習し、自然についての理解を深める。

地域、PTAなど他の人と連携し、活動し、共に生きていくことの大切さを知る。

▼活動の内容

桐生川を理科・総合的な学習の時間で、活用する。水生生物調査、川流れ体験をしたり、ヤマメの育成・放流、「友禅流し」ビデオ学習、川の安全学習、地域の洪水歴史学習の実施、地域で桐生川についての発表し自然保護活動を啓蒙する。また、育成会・青少愛・区民など地域と連携し、河川愛護活動のネットワーク化し、活動の連携を深める。



文化祭での発表

▼活動の効果

桐生川を愛する生徒の育成が図れた。
土手清掃など進んで地域の環境を整えるボランティア精神が育成できた。
育成会、区民、「かわづくりネットワーク桐生」（小堀順代表）、「桐生の清流と森林を守る会」などと連携し活動した。

文化祭では、国土交通省関東地方整備局渡良瀬出張所より、水質の資料提供や文化祭の協力、総合的な時間の学習の助言や水質検査の指導を受け、環境教育が充実した。

▼苦勞した点・反省点

地域との連携において、連絡調整の時間の確保がとりづらかった。

夜の会合で、つらいことがあった。
部活動の時間と活動時間が重なり合うなど、清掃活動時間の設定に配慮が必要であった。

調査活動の拠点選びなど工夫する必要があった。

霞ヶ浦の水の白濁の謎に迫る



パネルと論文が完成して喜びいっぱい



NH Kが活動を取材

▼活動の目的

霞ヶ浦の白濁現象については数年前より全国的問題として取り上げられている。しかし、その原因についてはまだ詳しく解明されていない。昨年までの調査研究より、浮遊物中には多量のAlとりんが含まれることが分かった。そこで、この調査をさらに進めていけば、霞ヶ浦の白濁の原因が突き止められると考え、活動の目的を次のように設定した。

1. 霞ヶ浦の浮遊物中の金属は、周辺の土、または植物や生き物等の死骸に含まれている金属が溶け出し、流入河川に流れ込むことを調べる。

2. 浮遊物に含まれる金属がりん等の物質と結びつき、水中で白っぽい浮遊物になることによって、霞ヶ浦の白濁現象が起こることを探る。

さらに、上記目標を達成する活動を通して、生徒の科学的資質の向上もねらっている。

▼活動の内容

1. 霞ヶ浦流入2河川の上流と河口の2地点、計4地点を定期的に水質調査、浮遊物の調査を行った。

2. 流入河川周辺計14地点の土中に含まれる金属の調査を行った。

3. 植物や生物中に金属（鉄、アルミ、亜鉛）が含まれているかどうか調べた。

4. 雨水によって土から、あるいは金属単体から金属が溶け出すかどうかを調べた。

5. 研究発表会に参加したり、茨城県体験学習発表コンクールで研究発表を行ったりした。

6. NHK国際放送局の撮影取材を受け、活動が国内外に放送された。



大須賀津川上流の調査場所

▼活動の効果

2006年3月には「小柴昌俊科学教育賞」7月には「NHK国際放送局による撮影取材」と、卒業生達の成果が認められてきた。そのような成果を実感した現生徒は、とても自信を持って学校生活を送っている。感想の中に、「先輩が引退したあとに自分がこれからリードしていくこと、先輩がいなくなった後も、今までの経験を生かしてこれからもがんばりたい。」と、力強い。取材中のインタビュー「活動はどんなところが楽しいか」に対し「仮説と違う結果が出た時にどうしてそうなったかを考えると、また次の課題が出て、次の研究へとつながっていくことが楽しい」と答えるなど、科学的資質が高まり、これからの活動への意欲も高まっていることが分かる。

また、霞ヶ浦の白濁現象という問題は全国的問題でまだ明確になっていないにもかかわらず、生徒が浮遊物を調べる活動を通してその解明に迫ることができたことは、生徒が自らの科学的思考・判断を駆使して取り組むことができたと考えられる。

▼苦勞した点・反省点

- 1) 濃度変化の計測では、授業の合間や休日に測定するなど、連続できるように工夫した。
- 2) 水質調査地点の決定と浮遊物調査方法は、予備実験をしっかりと行い決定した。
- 3) 調査をするにつれて膨大なデータをどうまとめるか、どのように分析するか苦勞した。
- 4) 参加者の人数が増え、車の手配が不可能になったため、調査に行く際は自転車で行った。
- 5) メンブレンフィルターとパックテストをたくさん使ったため、予算の確保に苦勞した。
- 6) 浮遊物をろ過する際、フィルターが目詰まりを起こすため、何度も交換しなければならぬ。そのため、水をろ過するための時間が予想以上に要した。
- 7) 白濁原因の解明の際、AIとりんが関わっていることをどのように確かめるかよく考えた。

審査員から

研究発表会の実施や、マスコミを通じたアピールなど波及効果に期待ができます。(F・Y)

森と海をつなぐ川にまなぶ親子観察会



自然観察クイズ：河床の石に付着している生物はななに？

▼活動の目的

親子及び一般と教員を対象とした川の観察会を行うとともに、その中で、川について学ぶとともに、川を活動の場とした環境学習の手法を実践的に指導できる指導者を育成する。



▼活動の内容

札幌市内を流れる豊平川の支流、精進川とその河畔が活動の場である。

前半は、河畔広場（豊中公園と河畔）でのネイチャーゲーム（自然観察クイズ）、川の「はたらき」「生物の関係」「川の中の食物連鎖」森・川・海のつながりについての講話。

後半は、河畔林や岸辺の植物、川の魚や水生昆虫の採集、捕獲、観察を行った。体験的な指導学習を兼ね、指導のポイント等のまとめ、フィールド学習のまとめを行った。



指導員の説明をよく聞いて水生生物採集

▼活動の効果

札幌の都市部を流れる精進川の歴史と地域のかかわりを学ぶ中で、河川の護岸工事や改修の中で、自然が失われ、また回復の兆しが1年毎にみられる姿を実感、環境とのかかわりも深く認識できた。特に親子の参加は、親自身も学ぶ姿・感動する姿から、自らの生活への心構えにも変化が期待できる。指導者育成については、机上からフィールドへ出て実体験の中で指導力の育成を図るねらいは十分達成された。

▼苦勞した点・反省点

参加者が期待より少なかったことについて、広報に課題を残した。今後、学校への働きかけを行う点から地元教育委員会の後援を求め、学校に活動参加の意義を訴えることが求められていると考える。



松川は今年もきれい。楽しみながら水質調査



上流部で水生生物の分類



先生からの説明

▼活動の目的

市の中心部を貫流し、当市のイメージを形成する重要な河川である「松川」を、市民の憩いの場となるような河川にするための一つの方法として、河川の実態を把握するための調査活動を行うとともに、その結果を広く市民に知ってもらうよう、普及活動を行います。

▼活動の内容

8月27日、飯田市が委嘱しているジュニア環境チェッカーとともに、松川の2地点で下記の調査を行いました。また、その結果について、10月28、29日に生活と環境まつり実行委員会が主催する「生活と環境まつり」で発表し、市民への意識啓発活動に取り組みました。

< 調査内容 >

1. 松川の状態：幅、深さ、流速、川底の状態
2. 水質：透明度、におい、温度、pH、COD
3. 生物：種類、数



中流での水生生物採取



2箇所の結果のまとめ：上流部・中流部ともに「きれいな水」と判定できました

▼活動の効果

参加者へのアンケートでは、「松川はきれいな川なんだなあと、思いました。飯田市内の川だから、かなり汚れているイメージがありました。が意外でした。」
「松川は、とてもきれいな水だという事がわかりました。上流は、ゆるやかで、遊ぶのにいい所だと思いました。」「上流と中流で少し生き物が変わっていたのがちょっと、びっくり」などの感想が寄せられ、松川に関わることで、よりふるさとへの愛着が深まり、松川を大切にするという思いが醸成されたと考えます。毎年定点観測を行っているため、経年変化が把握できます。

▼苦勞した点・反省点

当初は子供たちが夏休みに入った7月最後の日曜日に行く予定でしたが、その直前の豪雨により、延期をせざるを得ませんでした。そのため、参加者が減ってしまい、残念でした。
1ヶ月で水生生物が川に戻るかが心配されましたが、多くの生物を観察できてよかったと思います。
市民への意識啓発という点で、活動のPRをもう少し積極的に行えばよかったと反省をしています。

那珂川に伝わる伝統漁法調査と漁体験



投網の見学



投網の方法を習っているところ

▼活動の目的

人と川の関わりを学ばせるため、那珂川で昔から漁業に携わっていた人を講師として招き、実際に各種の漁法を体験したり魚類の生息状況を聞いたりして、自然環境や生物の生息状況の変化を調査する。その結果を本町で10月に予定されている「全国生涯学習フェスティバル」で発表し、広く参加者に自然環境の大切さを啓発する。

▼活動の内容

1. 本授業（総合的な学習の時間）の目的や計画について話し合い、今回のいろいろな漁法の体験の計画を児童・講師・指導教諭で立てた。
2. 和船で現地に赴き、海岸からの「釣り」・「笹浸し漁」・「投網漁法」等のいろいろな、漁法を体験したり見学したりして、漁法や獲れた魚について知った。
3. 地域のお年寄りや家族など地域住民に過去の那珂川で獲れた魚について尋ねたり現在の漁法と比較したりした。
4. 分かったことを文章や写真で構成したパネルにして、発表資料を作成した。
5. パネルの発表資料に基づき、「まなびピアいばらき2006 in大洗」（第18回全国生涯学習フェスティバル）の大洗会場「大洗町文化センター」のロビーに資料を展示し、9時30分と14時の2回口頭での説明を行ったり質問を受けたりして、発表を行った。



▼活動の効果

1. いつも目にしている身近な那珂川で、いろいろな漁法を体験できたり、いろいろな種類の魚が獲れたりしたことに、児童達が感動した。

2. 「笹浸し漁」では、昔からの伝統的な漁法の素晴らしさや素朴さ・準備の大変さに感心した。特に、笹（椎の木）の用意の大変さや仕掛けの方法、獲れたエビの数には驚いていた。

3. 「投網漁」では、漁師の行う投網の姿を見て、一見簡単そうに見える網の投げ方に、網の持ち方に決まりがあることや体の使い方、体力が必要なことが岸辺での体験で分かり、その漁法の凄さ・偉大さに気がついた。

4. 餌の付け方や釣り竿の投げ方など釣りの具体的な技術を覚え、家族で釣りに出掛けるような児童も出てきた。

5. 沢山の岸辺や川の中のゴミを見つけ、川を汚さないことや自然を美しく守ることの大切さ、自然資産に触れる喜びを学んだ。

6. 獲った獲物を家庭で料理して食べた児童は、自然の恵みの有難さや料理法についても学ぶことができた。

7. 「全国生涯学習フェスティバル」におけるパネルによる展示発表では、一般の方々を前にして、自分たちの活動を分かりやすく発表する練習や本番を経験して、人前での発表の技術的な事柄や心構え・度胸等を学ぶことができた。

▼苦勞した点・反省点

1. 「釣り体験」では、11人の児童に3人の教師という割合で、仕掛けを繋いであげたり絡んだ糸のよりを戻してあげたりすることが、時間的に厳しかった。初めての児童達にとって釣りのポイントを見つけて釣り糸を垂らしたり、釣り竿をコントロールすることは難しかった。

この活動では、児童達にとって釣りは難しく、多くの魚を釣り上げてその種類を覚えるような調査活動には無理があった。

2. 自然を相手にした活動、そして児童を対象とした活動のため、朝の時点での活動をするか取りやめるかの判断が難しかった。また、雨天の場合、その記録写真の撮影がカメラの機密性等から、その扱いに苦勞した。

3. 「投網漁法」では、年配の講師宇佐美さんに揺れる船の上で、延べ3回の乗船で約30回の投網をしていただき、健康を害するのではと心配した。投網の方法について、小さな投網を用意していただき、砂浜のような岸辺で講師から教えていただき、その楽しさや魅力が分かり何度もやらせてほしいとせがんでいた。投網の数が沢山あれば、もっと技術的な学習ができたかなと感じている。

4. 「笹浸し漁」では椎の木を見つけ、切り取り束ね、川まで運び込み、沈める作業が講師一人で大変だったようだ。直径50cm、長さ1メートルの束9個を沈めておいて3つの班編成の児童達に見せてくれた。

5. 回数を重ねる内、釣り竿での釣りについては、餌の付け方や竿の投げ方、リールの使い方などが慣れてきて、自分で釣りを楽しめるようになった。

6. 「全国生涯学習フェスティバル」の会場でのパネル発表では、「大洗町文化センター」ロビーを通行する人がパネル展示に目をとめて、発表を聞いてくれるものと予想していたが、それぞれの予定や出演で慌ただしく人集めに苦勞をした。



審査員から

伝統漁法の伝承という意味で大変貴重な取り組みと考える。(T・H)

ふるさとの自然や人々から学ぶ



水生生物による水質調査



バックテスト

▼活動の目的

本校々区には、吉野川（紀ノ川）が流れ、国体のカヌー会場になった場所やキャンプ場がある。また、古事記・日本書紀に「阿太の隼人」の記述があって伝説や遺跡もいくつか残っており、自然的にも歴史的にも豊かな地域である。しかし、川遊びは危険ということで川に親しむ機会はほとんどなく、地域の歴史を知ることもない。そこで、総合的な学習の時間や生活科では、「ふるさとの自然や人々から学ぶ」というテーマで課題を設定し取り組んでいる。川に親しみ、地域から歴史や文化を学ぶことで、故郷に誇りを持つことを目的とした。

▼活動の内容

川に親しむ：地元の釣り名人から魚の獲り方を聞く。「釣り」や「びんづけ」をして魚を獲る。このときに捕獲したナマズを教室で飼っている。

川を調べる：水棲生物やバックテストを使って、水質を調べる。

川から学ぶ：川にまつわる伝説を聞いたり遺跡を巡る。吉野川の上流を探索し、水の大切さを学ぶ。

発表会：保護者や地域の人を招いて、学習発表会（わくわくキラキラ集会）をする。



吉野川にまつわる伝説を聞く



保護者、地域の人を招いて発表会

▼活動の効果

昔（30年ほど前）に比べ、現在は棲んでいる魚の種類も数も減り、水質も汚れていることが分かった。水の大切さを学ぶことで、身の回りの無駄遣いもなくそうという態度が育った。

伝説や遺跡は大人でも知らない人が多くなっている。住んでいる地域に素晴らしい歴史や文化があったことを喜ぶ姿が見られた。

▼苦勞した点・反省点

カヌー教室はインストラクターが地元にはいないため、大阪から来てもらう関係で土・日曜しか実施できない。今回は7月の実施予定日が大雨、9月の予備日は増水ということでやむなく中止した。平日に実施できないので日程を組むのが大変である。

学習の進度や他の学校行事で、計画通りにできないことが多々あった。来年度は、ゆとりをもった計画を立てて実施したい。

自然、歴史の再発見とデジタルマップづくり



印賀川水系の地域を知ろう



デジタルマップ

▼活動の目的

鳥取県の三大河川の一つ「日野川」の源流を有する日南町。その日野川および支流の恩恵を受けてきた私たちが、自ら誇れる自然、歴史といった地域環境を再確認して町内外の人々へ情報提供を行うことを目的としている。

▼活動の内容

本活動の柱は二つである。一つは地域環境の「再発見ツアー」である。この活動では住民の参加を得て、地域をよく知る方（案内人）の説明を聞きながら直接地域を歩いたり、地域外の方との交流を図り地域環境の再発見を行った。もう一つは、ツアー等で再確認された地域環境データについて「デジタルマップ」を作成するワークショップを会員中心に数回行った。なお、デジタル化の技術的側面については、専門家から助言・協力を得ながら取り組んでいる。

▼活動の効果

自分たちの地域を改めて知るということで、これまで何気なく見つめふれてきた水系地域環境の価値や意味を共有することができた。日野川水系の恩恵は、農業など直接的なその水辺にとどまらず古代製鉄「たたら」など流域地域に広がっていた。そういった資源の歴史や価値を守り伝えられたらという意識が会員を始めとする参加者に芽生え、その思いが少しずつながら有形無形の資源の保全意識にもつながった。

▼苦勞した点・反省点

地域を知る再発見ツアーなどにおいて、活動のPRが弱く参加者があまり多くなかった。特に自分たちの地域を知ってほしい若者世代の参加が少ないのは今後の課題でもある。活動を広げる為にも、作成したデジタルマップなどのツールを用いて気軽にふれやすい情報発信につなげていきたい。

三峰川フォーラム「霞提に学ぶ」

▼活動の目的

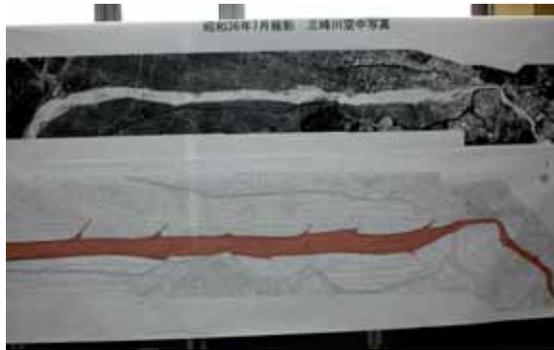
「あばれ天竜川」の最大支流三峰川は、広い氾濫原をもっており肥沃な耕地です。先人たちはこの川を治め農地とするために、洪水を緩やかに受け入れながら抑える「霞堤」という工法を生み出し、今日もなお遣っています。そのため改めて霞提と人々の関わりを学び、この実用的な川の遺産をどのように次世代に受け継いでいくのか話し合いの中で文化財としての位置づけを明確にして保存体制をつくることです。

▼活動の内容

現地学習会の実施
主な3箇所の霞提について、夫々地元有識者の案内で築造の経緯等の説明を受けながらつぶさに現地視察を行いました。

三峰川みらいフォーラム開催
基調講演として「日本人が抱いた水と堤防への意識」と題して信州大学教授により約1時間半にわたり講演が行われました。

その後「霞提の歴史と未来」をテーマとして7名の各分野の有識者により座談会を行いました。



三峰川霞提の新旧パネルの展示

▼活動の効果

「霞提」という河川工法が、全国的に数少ないことを多くの参加者が認識しました。また、霞提の更に外側に「自衛堤防」と呼ばれる独特な堤防の存在を改めて知らされました。これも現地視察の成果と思われます。ある霞提の場所では、市街化が進み先人の残した貴重な財産が忘れられようとしている実態が浮き彫りになっている現実を検証しました。以上のことから「霞提」という川の遺産を「文化的財産」として今後残していく必要があると多くの皆さんから声が上がりました。行政も関心があり、なんらかの形で残す方向に光明がありそうです。

▼苦労した点・反省点

現地学習会とフォーラムが1日の行程であり又、テーマも専門的で広報誌、チラシ等で呼びかけしましたがほかの行事とも競合して参加者が予定より少なかった。今後の課題として開催時期、宣伝活動の方法など一工夫する必要があると感じました。講師や有識者の皆様には、参加に快諾していただき、討論も活発で、フォーラムが成功裡に終了し感謝いたします。

「頭でも理解する」水環境学習の場づくり

NPO 登別自然活動支援組織モモンガくらぶ



尽きることのない
子どもたちの活動



足下に注意して...



これはなんだろう？！

▼活動の目的

生き物には「水」は欠かせない存在だが、日常当たり前にある水や水環境について理解を深める場をつくりたい。日常使う水の源である河川、自然と日々の暮らしのつながりについて再考し、又、水生昆虫を通じて水環境（水質）について理解を深める。前年度助成活動の成果として、それらを広く伝えていく場を創出すること。以上を目的とし、企画・運営をした。

▼活動の内容

当初1日を予定していたが、1泊2日で実施した。

1日目：午前[講義] 鉾山の自然 / 午後[フィールド実習1] 水質調査・水生昆虫調査、種の同定 / 夕方(雨天のため) / 夕食後、水生昆虫のサンプリング

2日目：午前(雨天のため、早朝散策は中止) [フィールド実習2] 水生昆虫がハッチした痕跡を探しにいこう
[まとめ] 今回の調査結果、「私たちのくらしと水・川・生きもの」



川の中にはこんな虫がいるんだ！



同定作業

▼活動の効果

今回は、昨年から指導者養成講座を受けたスタッフが中心となり、プログラムの企画・運営を行った。プログラムとしては、「伝える」という点や2日間のプログラムにどう流れをつくって運営していくか、ということはまだまだ経験値もすくなく大変だったが、とにかくやれたことで自信がついた。

水生昆虫調査を昨年度から進めており、川に対するアプローチの幅が広がり、より多くの人に遊びとは違った「川に触れてもらう」機会をつくるモデルがひとつ完成したように思う。

いつものプログラムは参加者に対して「遊ぶ」ということだけだったので「頭でも理解する」場をもったことで、参加者に対しても新鮮な気づきを提供することができた。

▼苦勞した点・反省点

2日間になったことで、子どものモチベーションを維持するためにも、学びと遊びをうまくミックスさせながら展開を図った。ただ、遊びになりすぎることなく、「水生昆虫」や「川の生きもの」「川の様子」を感じとってもらえたようだが、集中力が高まるまでの間、大人がファシリテーターとして配置しておいたことでなんとかできたようにも思う。その子どもの興味に合わせて大人がフォローできる体制、特に「学ぶ」スタイルの講座の際には、必須だと思いました。

オニバスの再生～地域の環境に関心をもつ～



オニバスの観察会



百間堀の塩分濃度測定

▼活動の目的

校区の兵庫県あわじ市阿万塩屋の百間堀に、10年位前まで自生していたオニバスが、今は見られなくなってしまった。地域の人たちが再生を目指して、保育所から簡易プールをもらって、明石市江井ヶ島から種をもらってきて再生を試みていた。それを中学生やより多くの人に見てもらうために、中学校で生育させることになった。オニバスは、葉の大きさが2m以上にもなる。1年草では日本で一番大きくなる植物である。このような植物が校区に自生していたら、再生に取り組んだり観察したりすることで、環境問題に関心を持ってもらうことを目的とする。

▼活動の内容

土ふるい：淡路島（阿万）に自生していたオニバスの種を使うため、地域の方が再生に使っていた明石市のオニバスの種が入っていたので、全部ふるいにかけてその種を取り除いた。4人ずつグループで15分間ずつ土をふるいでおろした。放課後に1日4～5グループずつ、1年生208人全員で行った。

塩分濃度測定：オニバスの消滅の原因の1つ、塩分濃度を調べるために、塩度計を使って調べた。

オニバス観察会：生育したオニバスの花の様子や、葉の付き方、葉や茎のとげの様子などを観察して、オニバスを育てた感想文を書く。

▼活動の効果

初めてオニバスを見て、すごく大きいと思った。これからもオニバスを生育させたいと思う。

絶滅危惧種のオニバスの生育に協力することができて本当に良かった。

この活動がもっと広がって阿万の百間堀にオニバスを戻してあげたら良いと思う。

地域の方が見に来たり、初期のころ地域の人に苗を分けてあげた。

以上のように生徒が感想を持ったように、地域の環境への関心が高まった。

▼苦勞した点・反省点

地域の方が使っていた簡易プールに入っていた土を運んできて、明石市のオニバスの種を取り除くために、ふるいにかけてことが苦勞したことである。水をはって、別の小さな容器に育てたオニバスを植えたら、後は自然に大きくなった。

洪水の被害を防ぐ遊水池等の清掃活動



水質調査



砂押川周辺の清掃活動

▼活動の目的

砂押川の観察・水質調査・清掃などの体験活動を通して、川を大切にしようとする態度を育てるとともに、地域の水質保全や環境保全活動に対する理解と関心を高める。また、行政及び地域の関係機関との連携並びに保護者の協力を得ながら、自然とのかかわりや郷土への理解や郷土愛を育てる。

▼活動の内容

事前学習として、学年全体で川と人間との関わりについての講話を聞き、今自分たちができることは何かを把握する。それをもとに、砂押川周辺の地理、歴史、水質等を、実地調査をもとに学習し、清掃活動や水質を保全するポスターの制作、貼付等を行う。

▼活動の効果

1学年生徒、及び担当教員は今回の活動を通して自分たちの住んでいる地域にある河川である砂押川についての良さや問題点を知り、自ら清掃を行うことによって水質保全活動を実施することが出来た。また、宮城県の協力を得た全校講和や学年講和を通して、宮城県の河川や上水道、下水道の仕組み、過去の洪水の被害の上に立つ遊水池の有効性を学ぶことができた。また、生徒たちは、考える力、調べる力、情報を集める力、情報を活用する力、話を聞く力、内容をまとめる力、友達の良さを認める力がついた。

▼苦勞した点・反省点

地域との関わりとの観点から、宮城県広域下水道管理事務所、宮城県東土木事務所のご協力をいただいたが、地域のお年寄りの方々への働き方が不足しており、地域ぐるみでの活動とならなかった。

自然再発見と異世代間の交流づくり



藻川の生き物調べ

▼活動の目的

自然がほとんどなくなってしまった尼崎市の中で、猪名川・藻川に囲まれた地域は、豊かな自然が残る貴重なエリアであるが、地域住民には知られておらず、川で遊ぶ子どもの姿もまばらである。そこで「川遊び」や「リーダー育成講座」等を行い、自然の楽しさや大切さを再発見する。



▼活動の内容

1. 「水辺で楽しみ隊」(川遊び)
(7月～9月に2回) 参加者 約40名×2回

市内の親子を対象に、藻川の生き物調査・水質調査(パックテストpHとCOD)を楽しみながら行いました。

2. 「メダカ探し隊子どもネット」
(夏休みに4回+発表) 隊員9名×5回
川のリーダー育成の為、これまで「水辺で楽しみ隊」に参加していた子どもでグループを作り、夏休みを通して深く川の事を学ぶ活動を行いました。

川の生き物しらべ
琵琶湖博物館へ淡水魚研究
ハリヨの棲む川見学
水源地探究と上流の生き物調べ
研究のまとめと成果物作り
地域のフォーラムで活動の発表



慎重にねらいを定めて...



調べた魚のまとめ

▼活動の効果

環境保全を推進する団体としての当協会が、子どもをテーマに子ども会や学校をはじめさまざまな組織を巻き込むことで、それぞれの組織を超えた大きな連携のもとでの活動が実現できた。
また、子どもの活動を支援するという目的で地域の大人や青年に呼びかけることで、異世代間の交流が生まれた。
藻川の生き物観察等を通して、地域の自然の素晴らしさを再発見した。

▼苦勞した点・反省点

今年は雨が多く、日程を変更したり、内容を変更するなど予定通りにできなかった。

生き物採集のエリアを設定しておらず、広範囲に広がってしまい集合をかけるのに時間がかかった。

「川のリーダー育成」では、6年生と4年生のレベルの差が大きく、内容に苦勞した。

官民協働による清流復元と歴史・文化の継承



葦船体験

▼活動の目的

尼崎では地域の自然環境を保全するため、尼崎市と市民の協働により様々な活動を行ってきた。18年度は尼崎市制90周年という節目の年でもあり、猪名川最下流の尼崎のみならず猪名川流域全体の連携を目標とし、実行委員会を立ち上げ、「水辺のまつり」や「フォーラム」を通して流域住民を巻き込みながら、猪名川の清流復元や歴史・文化の継承のあり方を見いだす。

▼活動の内容

1. 実行委員会開催 4月～9月 (12回)
2. 「水辺まつり」9月17日(日)
於：藻川河川敷 参加者：約2000人

カヌー、筏、Eボート、葦船体験
流域連携川下り
藻川の生き物調査
藻川の魚つかみ体験
捕れた魚の試食会
自然工作
水辺のコンサート
模擬店など

3. 「猪名川フォーラムin尼崎」9月18日(月) 於：英知大学 参加者：約200人

<テーマ> 猪名川を知ろう！話そう！つながろう！
基調講演 「猪名川の川づくりから街づくり」

講師：武庫川女子大学助教授 三宅正弘氏

猪名川流域活動団体 活動発表
ポスターセッション
子どもの発表
猪名川連携川下りの報告
コメンテーターによる総括と来年度に向けた提案
最上流域より猪名川への思い
猪名川流域同盟 猪名川町長 真田保男氏



講師のみなさん



漁業組合の協力を得て生き物採集



魚つかみ体験

▼活動の効果

1. 水辺まつりでは猪名川流域住民が多く参加し、水辺の体験をすることで地域の財産としての水辺環境を再認識することができた。
2. 猪名川フォーラムでは、猪名川流域で活動する市民団体が多く集い、情報共有することで清流猪名川再生に向けての連携の下地作りができた。
3. 国土交通省（猪名川河川事務所）、兵庫県、尼崎市や猪名川沿川自治体、教育委員会など行政支援の他、猪名川流域同盟・猪名川河川レンジャーの協力や企業の参画も得られ、“行政・市民・企業の協働による川づくり”に向けた取り組みのモデル事業となった。

審査員から

官民協働による文化歴史の継承ということで、将来100周年に記念を目指し、頑張ってもらいたい。
 (T・H)
 川を通じての地域連携のモデルとしてこれまでも実績を積み重ねており、参考になる事例です。
 (D・Y)

▼苦勞した点・反省点

PTAや子ども会、地域の夏祭りの準備にあたる人材と実行委員構成メンバーが重なり、思うように準備がはかどらなかった。結果、参加協力して頂いた多くの方への対応が丁寧にならなかった。

河川敷の利用ということでは規制が多く、占用許可をとるのに苦勞した。

水辺の体験にはたくさん子ども達が集まり、怪我のないよう安全対策に苦勞した。

カヌーで観察する琵琶湖内湖の生態系



いざ！琵琶湖へ！

▼活動の目的

滋賀県湖北町にある野田沼は、琵琶湖の周辺に存在し、水路によって琵琶湖と直接結ばれた内湖のひとつである。また、内湖は琵琶湖の生態系にとって重要な役割を持つことが知られている。カヌーを使って水辺に親しみながら、普段は見ることの出来ない場所から野田沼の生物を調査し、その役割を学習することを目的とした。

▼活動の内容

カヌー指導者による実地指導の後、野田沼と琵琶湖でカヌー体験を行った。野田沼ではカヌーに乗りながら、水生植物の採取やスケッチをし、湖岸の環境を観察した。カヌー体験後は、採取した水生植物と図鑑を見比べて調査記録をまとめた。専門家による指導で10種類の水草を同定し、野田沼と琵琶湖の関係について学習した。事後研修として、琵琶湖博物館にて琵琶湖の魚類と内湖の関係について学習会を行った。



野田沼と琵琶湖を結ぶ水路にて



水草の分類

▼活動の効果

野田沼（内湖）と琵琶湖の違いを水温・透明度・波などの物理的視点と、水生植物・魚類という生物的な視点から学習し、内湖が貴重な生態系を持っていることが理解できた。また、これらを単なる知識としてでなく、カヌーに乗って水辺での体験を通して得たことで、飲み水として利用しながら日常生活からは遠い存在であった琵琶湖を身近に感じる事ができた。活動を通して地元の漁業組合、消費者グループとの交流も盛んになった。

▼苦勞した点・反省点

当初はカヌー体験前に学習会を予定していたが順番を入れ替えた。先に水辺を体験する活動を行ったことにより、学習会の意欲が向上したと評価している。

カヌーの輸送と安全確保に苦勞したが、指導者および多くのスタッフの協力により、無事に活動を終えることができた。

仲間とチャレンジ！自然環境の保全



閻刈溪谷を元気に出発

▼活動の目的

学区を流れる乙川の地形・動植物・水生生物等の水辺調査や観察をするとともに、河川美化活動を通して、自然環境への関心と保全しようとする意識を高める。
市町村合併を気に、乙川の源流（男川）を訪ね、川に沿って歩くことを通して自然を愛する心や仲間と励ましあって歩きぬくたくましさを育てる。

▼活動の内容

乙川の水辺調査や観察を行い、チャレンジマップを作成する。
乙川の清掃や河川美化活動（クリーンプロジェクト イン 乙川）を行う。
乙川の源流（男川）より、川に沿って学校まで歩くチャレンジウォークを行う。



乙川河川敷のゴミ拾い



河川美化の看板を掲げる環境委員



チャレンジウォークのまとめの掲示



24Kmを完歩してゴールでVサイン

▼活動の効果

長年にわたる河川の美化活動では自分たちの住む地域に関心を持ち、豊かな自然環境を残そうとする意識の高揚を図ることができた。

男川に沿って歩く24kmの道のりは、大変さもあったが、川の流れとともに移り変わる景色と仲間の励ましで、ほぼ全員が完歩し、友との絆を深め、気力と克己の力を培うことができた。

チャレンジウォークでは、額田地区にある鳥川浄水場の「額田仙水」を配布したことで、河川美化の意識をいっそう高めることができた。

▼苦勞した点・反省点

水質浄化やゴミの減少はまだまでであり、今後も長期的な調査や啓発活動が必要であると実感した。

チャレンジウォークでは、交通事故防止のため、危険ポイントや交差点等で保護者の協力を依頼した。

厳木川の再生と町切水車に学ぶ環境学習支援

自然と暮らしを考える研究会



田んぼの学校：水に棲む生き物を採取



川の安全教室：お母さんと一緒に川流れ

▼活動の目的

水車が回る用水路や傍を流れる厳木川を活動のフィールドとして、近隣の小中学校の生徒たちが「環境学習」できる水辺の環境整備（草刈・危険物の除去）と水の多様性について学ぶ学習を支援する。また世代交流の「川の安全教室」の開催。特に高齢者の人材（指導者）活用に向けての育成を図り「水辺が子供たちが安心して遊べる居場所＝水辺の楽校」につながる活動をめざす。

▼活動の内容

6月～12月：河川周辺の安全対策と環境整備（活動のフィールド400m）を年に数回実施しました。

5月～9月：小中学校の「総合的な学習」を使って川の探検・魚の観察会・水質検査や水車の模型を作り水路で回す実験などの学習支援（出前講座）また偶然だったが9月16日、唐津市を襲った集中豪雨による土石流が発生、被害を受けた小学校運動場の復旧支援体験をした。

8月3・4・5・6日：夏休み親子リバースクール（世代間交流・川の安全教室）を開催 11月21日：「総合的な学習」で学んだ「学習の成果」を市内の施設で地域社会に向け発表をした。



水車が無事に回って大満足



父兄や地域にむけた発表会

▼活動の効果

高齢者が持つ知恵と経験を活用した、子供の水辺再生・推進は、少しずつ定年前後の人たちの協力者も多くなってきた。そして子供たちの学習支援活動にも一定の評価は出てきている。時間はかかるが高齢者の生涯学習の居場所として定着できるように関係当局への話し合いも進めています。また夏休み親子リバースクールのゴムボートは意外に好評だった。

▼苦勞した点・反省点

今年は、6月以降雨が多く7月に予定していた「総合学習」の時間（時間割＝計画日）での学習環境は、水量が多く思うように成らなかった。しかし中学校1年生の「水防についての研究班」に於いては、9月16日に発生したこの地区の土石流被害に際して、母校の運動場「復旧支援」体験学習は有意義だった。

筑後川のありのままの姿を伝える活動

▼活動の目的

筑後川流域には豊かな自然や歴史と人々の生活が存在する。そのありのままの姿を流域住民が学び、知る場としていく。過去の大水害の記憶を後世へ伝え、また自然景観の美や、長い歴史があって今の生活があることを伝えていく。そして、川に関する人々の関心を高めることで、河川環境の改善へとつなげていく。

▼活動の効果

今回行った講座には多くの市民が参加していただき、今後もぜひ続けてもらいたい、もっと内容を充実してもらいたいなどの前向きな声をいただいた。特に6月の「昭和28年大水害の発表大会」では体験者が名乗り出て頂き、それをきっかけに参加者から貴重な体験談を収集できた。これは今後の防災にも生かせる。10月の「魅力探検」講座はスライドで流域の魅力を語る内容で、一般の人が知らない情報も伝えることで関心を高めることができた。

1月の「歴史を知ろう」講座は、流域の中世の歴史を系統立ててわかりやすく解説することが好評でありシリーズ化が希望された。

▼活動の内容

筑後川発見館「くるめウス」において「筑後川ものしり講座」を行う。流域の自然や生活、歴史について、豊富な資料、映像などを基に、地域住民自らの体験や語りによって、わかりやすく親しみやすいイベント、講座とする。市報、チラシなどによって参加者を募集して行う。

平成18年6月25日 昭和28年筑後川大水害の体験者証言発表大会

平成18年10月15日 筑後川を知ろう「よか川筑後川の魅力探検！秋の美を探る」講座

平成19年1月28日 「筑後川流域の歴史を知ろう」講座

▼苦労した点・反省点

「大水害の発表大会」では、体験者で発表できる方を探すことに苦労した。「魅力探検」講座では、一般的に見慣れた風景、情報でなくまだ知られていない情報、知りたい情報を集めることに時間がかかった。「歴史を知ろう」講座は、平安から秀吉の時代の流域の情報を集め、整理し、系統立てることに時間をとった。全体的に反省点としては準備に時間がかかり、広報の期間が1ヶ月程度しかとれなかったこと。



昭和28年大水害の写真展



市民講座：筑後川の歴史を知ろう

筑後川まるごと博物館 運営委員会

駄田井 正 / 鍋田 康成

kic@kurume.ktarn.or.jp

http://ccrn.jp/

河川空間の創造による地域の交流拠点づくり

▼活動の目的

現在、地域と白川の繋がりを阻害している支障木を取り除き、日常の中で川面を目にする。また、水辺に気軽に立ち寄れる環境を創ることで、白川に対する意識を強化し、白川が様々な地域活動の拠点となることを目指す。また、活動が継続的に実施されることで、地域外との交流の場となるような河川空間の創造を目的とする。

▼活動の内容

白川について、「自然活用ゾーン」「自然保全ゾーン」等のゾーニングを行政と共に行ない、自然活用ゾーンとした区域に関して本会議のメンバー及び地元の方で支障木の伐採を行った。本来は、地元小学校の児童も含んで実施する予定であったが、のこぎり等の刃物を使用することから、本活動実施の初年度である今回は、児童が参加した場合のリハーサルの意味合いも含めて作業スペースを確保した。当日は、細めの木の伐採や、倒された大木の枝切りなどを行った。



伐採された木の片づけ

▼活動の効果

今まで木が生い茂り川面が見えない状態であったのが、今回の伐採により見えるようになり、川の美しさ、すばらしさが地元の方に伝わったようで、「もっと白川を手入れしていきたい」という声が聞かれるようになった。また、白川を活用していきたいという意見が強くなり、フットパスを作ることを目標にした委員会が地元で立ち上げられた。

▼苦労した点・反省点

当日雨天であったことと、河川敷が普段から手入れされているような場所ではなく、地面がデコボコであったため、伐採した木を集積場所まで持って行く作業が大変であった。児童を参加させる際には、伐採を手伝う班と伐採した木を運ぶ班にわけて実施するようにしたい。

サンちゃんが教えてくれる地域の大切なもの

サンちゃんと友だちになる会



あっ！発見！！

▼活動の目的

国の天然記念物「オオサンショウウオ」の実態を知る事により、私たちの里を知り、自然環境の保全・保護の重要性、生命の尊さを学び、オオサンショウウオの保護活動に対する認識を高める。また、イベントを通じて体験や観察、自然にふれる機会を設け、いじめやひきこもり、さらには登校拒否など今、危機的な環境にある子どもたちの「生きる力と健全な資質」を育むためには、幼児時代の十分な自然体験活動と環境学習が必要である。私たちは、この活動を通して、幼児は学び、まわりの大人は「育む」ことの出来る場とし、江の川の源流域の自然環境、資源、文化を生かして、地域間の交流や青少年育成のための世代間交流を図り、地域活性化につなげることを目的とする。

▼活動の内容

1. 星の観察会
2. 川ガキ大将養成講座 2回
3. 山探検 2回
4. 第9回サンちゃんと友だちになる会



いろんな生き物がとれたよ



サンちゃんに会えました

▼活動の効果

「サンちゃんとうだちになる会」1回～9回まで工夫しながら開催していくうちに、地域の大人は「三チャンス村」としてオオサンショウウオの保全活動をおし、地域の大切なものを守りながら子どもたちへ伝えていく催となった。

地球ふしぎ大自然の取材放映や、今はイギリスのBBC放送が取材の真っ最中で、多くの人々が理解し、遠近各地より訪ねて来られる人も増えた。この夏はこうして子ども達や三チャンス村の人たちが、サンちゃんの育つ地域の山と川と空に沢山のことを教えて頂き、育てて貰っている。サンちゃんの生きている姿を安佐動物公園の方よりスライドで見せてもらったり、NHKの放映をビデオで見せてもらい、サンちゃんの苦勞を知ることができた。またリバーフロントの助成で魚道、人工巣穴、サンちゃんロードが出来て、この夏休み中に広島市内より親子で勉強のために訪れて下さった。

▼苦勞した点・反省点

星の観望会を台風や雨のため変更しなくてはならない時、プラネタリウムの舎へ行かせて頂き、室内勉強会に変えたりした。

「サンちゃんとうだちになる会」を催すのに日程がなかなか決めがたく、三チャンス村の人たちの全大会までに何回も夜会を開き、村民みんなの盛り上がりを大切にしてきた。



サンちゃんとうだちになる会
朝枝 喜代香

<http://www.yamanami-net.jp/futaba/>

海を守れ！海洋戦隊マイクロレンジャー



がんばって探して司令官に報告だ

▼活動の目的

一般市民の海に対する関心を喚起し、海辺の環境保全意識を高める目的で、海水浴場にて海洋生物と海水浄化システムの関連性を扱った親子向けワークショップを開催する。その一方で、海水浴場や地元公民館との連携を強化したり、学生などの地域住民も協力者に加えたりしながら、活動を通じた地域の活性化をはかる。

▼活動の内容

一般の親子10組29名を対象に、出崎海水浴場のイベントの一つとして、海辺のワークショップ「海を守れ！海洋戦隊マイクロレンジャー」を実施した(2006年7月30日)。ワークショップでは、「海をきれいにする方法を見つけ出す」という使命のもと、海辺の生きもの調査や海水浄化実験などをおこなった。活動は、父親をリーダーとする班別でおこない、無線を主な連絡手段にしながら、『海を守るマイクロレンジャーの一員となって、海を汚す帝王ヨゴサナイトと闘う』という演出に則って展開された。



親子で協力して透明度測定



レンジャー認定書をもらいました



「海をきれいにする方法」大人班、子供班の意見発表

▼活動の効果

複数の親子が協力して、一つの使命のもとに同じ活動を体験することで、親子間、あるいは家族間のコミュニケーションが促進され、互いの絆を深めることができた。特に、父親を班のリーダーとし、無線で本部とやり取りをしながら進めてゆくことで、子どもたちだけでなく、保護者にも積極的に関わる姿が見られた。また、海水浴場の一角でワークショップを展開することで、海水浴場関係者や偶然居合わせた多数の海水浴客の関心も引くことができた。

▼苦勞した点・反省点

参加者を募集する広報活動が充分にできなかったため、参加者が予定よりも少なかった。

当日の学生スタッフの確保が予想以上に困難だった。(大学行事と重なったため、参加できる学生が少なかった)

より広範囲な広報活動と、学校行事を考慮に入れた早目からの日程調整が必要である。

審査員から

海水浴場でのワークショップというアイデアは新鮮に思います。今後、一般の海水浴客へのアプローチを積極的に行うことを期待します。(D・Y)

自然、歴史、文化を伝えるエコツアー



座学講習会の模様



エレクトリックボートに乗船してガイドトレーニング

▼活動の目的

都会の生活において、水辺を楽しみながら環境保全に対する意識を向上する機会として、自然、生物、歴史、文化などが残る神田川及び日本橋川エリアを拠点に、教育的旅行プログラム（エコツアー）を実施しています。このツアーにおいて、正しい知識を持って、自然環境や河川環境のこと、川にまつわる歴史などを伝えられる指導者を養成する目的で、指導者養成講座を実施しました。

▼活動の内容

はじめに、川にまつわる歴史や舟運について、日大名誉教授三浦先生をはじめ、専門の講師による座学を行い、参加者に基礎的な知識を学習してもらい、次に、環境負荷の少ないエレクトリックボートに乗り、神田川や日本橋川の歴史的な背景や治水及び環境保全に対する取り組みを解説しながらリバークルーズを体験、都市河川の現状と保全の必要性を身に付けてもらいました。

▼活動の効果

座学参加者20名、活動拠点となる地域をはじめ、その周辺流域の歴史や都市河川の構造、現在の状況などについて知識を身に付けてもらいました。うち船舶免許取得者3名と新規取得者2名が、ツアーボートのガイド役として抜擢され、今後操船テクニックの技術向上のため引き続き講習を行う予定です。

▼苦勞した点・反省点

苦勞した点は、参加者自身が船に乗って河川を眺める機会が殆んど無いため、ガイドとして解説するためのプログラムが、陸側からの視線となっていること。川側からの視点は、陸とは全く違うので、十分な経験が必要だと思えます。更に、ボートを操船しながらの解説が求められるので、要求される人材のスキル向上に時間がかかり、思った成果までいたらなかった事です。

隅田川の清流と景観と触れ合いの場づくり

▼活動の目的

隅田川が“東京の顔”に相応しく、地域に愛着と誇りの持てる川づくりを最終目標として、景観や生物生態系環境の保全・育成を図る。そのためにフィールドワークや生態系再生・回復化実験・ワークショップ等によりその可能性・方向性を検討し、市民・地域生活者が参画する親水空間の構築を探求する。

▼活動の内容

隅田川沿川テラス・ワンド等のフィールドワークと水系景観の観察
隅田川ワンドとテラス池等の水生物生態系保全・育成への実験（花菖蒲とメダカの放流実験）
フィールドワーク観察に基づくワークショップ検討
隅田川の市民参画による親水化構築方策へ提案策定



花菖蒲の植栽



ワークショップ「景観・生態系」

▼活動の効果

1. 市民・住民にとって隅田川沿川の景観・地域交流・生態系保全育成等を整備促進することの意義・重要性が強く認識された。
2. 少しの環境整備でも、その効果（例：アシを植えればカニが増える...）が直ぐに拡大して行くことの実感を得た。
3. 隅田川沿川テラスが多くの人にとっての参画に値する自然空間であること。

▼苦勞した点・反省点

野外フィールドワークにおける天候不順や交通機関のトラブル等による不測事態への対応方策の徹底化。
フィールドワークの観察や実験等におけるビューポイントや決定的瞬間の記録を取ることの難しさを克服する事前準備の徹底化。

身近なところに大切な生き物の住みかを発見



水路の草刈り



ハクセキレイ発見

▼活動の目的

堀立川遊水地で、水鳥類や湿地植物の観察会を通し、水辺の自然について楽しく学び親しむために、出現した鳥類や植物のリストを作成し観察を続けていく上でのテキストとする。また植生調査や定点観察を行い絶滅危惧種等の保全方法の検討資料とする。

▼活動の内容

野鳥観察会を2回行い、季節に出現する鳥類の資料を作成した。
植生調査を3回行い、希少植物の資料を公開し、保全について研修した。
観察会終了後にゴミ拾いや水路の草取りを行った(4回)。
希少植物や湿地植物の観察会を行った(2回)。



見て調べた植物や鳥について発表しました

▼活動の効果

活動場所である堀立川遊水地について、地域の方々も学区の小学生たちも「ただの草ぼうぼうの場所」というイメージで捉えていたが、観察会やゴミ拾い活動に参加してみて、ヨシがあることで営巣可能なオオヨシキリをはじめたくさんの鳥類がやってくること、湿地の植物の中には山形県で指定した絶滅危惧種が5種含まれていたこと、ハッチョウトンボも住んでいることなどがわかり、多くの生き物の棲みかであるこの場所の環境を保持していくため、ゴミ拾いや水路の草取り、周囲の草刈などを引き続き行っていきたいとの感想があった。堀立川遊水地を観察会を通して学ぶことで、街中にあり学校の近くにある遊水地をずっと守っていくという機運が高まった。

▼苦勞した点・反省点

植生調査は専門性が高く、地元にはその人材が少ないことから、時間をかけて人材を育成していく必要がある。季節ごとの調査や観察会を継続していくことにより、植物分類などに詳しい人々を育てる、ということも担っていければと思う。



浜尾遊水地の生態系回復状況

▼活動の目的

阿武隈川流域の洪水被害の防止と軽減を目指して、平成16年度をもって整備完了した浜尾遊水地は、その後3年を経て、植物・昆虫・哺乳類・両生類・魚類などが多数生息する生態系が構成される貴重な空間となりました。しかし、その実態については未解明の状態でしたが、この調査によって、現状を把握することができたので、若干の不満は残るが、生態系地図を完成しました。

▼活動の内容

浜尾遊水地自然再生協議会は、平成18年9月2日に地域住民の方々に協力を戴き、遊水地内担当ルートをそれぞれ調査しました。植物・昆虫・哺乳類・両生類・魚類は、カメラによって記録し、この生態学的調査データをもとに本会では、生態学地図を作成いたしました。この地図は、調査に参加された方々をはじめ、須賀川市民や福島県民に公表する機会を設けて、発表する予定です。



調査風景



浜尾遊水地のパネル

▼活動の効果

世界各地でナショナルトラスト運動が起きている中で、須賀川地域に国が所有する75haに及ぶ広大で、豊かな生態系が保全できる浜尾遊水地があることを、広く知らしめることができました。自然環境保護保全の必要性が提起される現在、浜尾遊水地が国家的意思として、環境教育を展開し、発信する場になることが期待できます。

▼苦労した点・反省点

- 1) 調査に参加される方々が予定より少なかった。日常の生活に追われている世代が多い社会の持っている必然性の結果かも知れない。
- 2) 浜尾遊水地の自然環境が持つ価値について、もっと啓蒙をしなくてはならない。
- 3) 調査手法については事前にガイダンスをしておくべきであった。

みんなで河川環境浄化の情報発信

▼活動の目的

平成17年度に助成を受けて水質調査及びゴミ拾いを2回実施した結果、テレビやラジオの取材もあり、地域住民に河川環境浄化活動の情報発信ができた。この成果を活かし、平成18年度も継続して水質調査・ゴミ拾い・発表を行い、住民の方々の河川環境浄化に対する更なる意識向上につなげることを目的とした。

▼活動の内容

平成18年6月4日(日)に、全国一斉水質調査に参加し、水質を調査すると同時に流域住民に呼びかけてゴミ拾いを行った(実施場所は、都城市2箇所・小林市1箇所・宮崎市1箇所・国富町1箇所の合計5箇所)。また、平成17年度に宮崎県の委託事業で作成した五感を使った水辺環境指標に添ったの調査も行った。2回目は、平成19年1月に実施した。発表は平成19年2月12日の大淀「川」のワークショップで行う。



上流から下流まで24カ所の水質調査



6項目について調査

▼活動の効果

区長・民生委員・学校の生徒や先生・NPOメンバー・役場の職員などの、さまざまな分野の参加者があり、テレビや新聞・ラジオの取材もあった。

参加した中学生から今後も続けていきたいと感想があり、各地区で活動を広めていこうという意見も出た。このことから、住民の方々の河川環境浄化に対する意識向上に効果があったと思われる。

▼苦勞した点・反省点

水質調査の採水は危険を伴うため安全管理に苦勞した。また、調査地点を広範囲に設定したため会場ごとの参加者集めにも苦勞した。今後は、早くから計画を立てる必要がある。

知恵と感動を伝える吉野川自然教室



昔の川漁師体験

▼活動の目的

国内屈指の自然環境をもつ吉野川を活用し、週末、子どもたちに川遊びの体験や自然体験型学習を行い、川と人、人との関係を大きく育て、吉野川を自分たちの川としてとらえてもらい、同時に「考える力」「生きる力」を育む場とする。

年間を通じた体験学習の中で、吉野川の生態系の豊かさ、四季の変化、移り変わりを感ずると共に、川と人との付き合い方・つながりを学ぶ。

▼活動の内容

吉野川でも特に自然の変化に富んだ第十堰付近から河口までをフィールドに、毎月1回、テーマに沿って体験学習をする。地元の漁師・自然観察指導員などを講師に迎え、動物から植物、そして川遊びの伝承、川漁、昔遊び、そして排水や公害の問題、農・海産物の経済まで、ありとあらゆる川に関連することを体験から学ぶ。

4月-汽水域の生き物調べ

5月-干潟の観察

6月-しじみ漁の体験

7月-川遊びキャンプ（1泊2日）

8月-川との付き合い方を学ぶ

9月-川漁師体験

10月-ハゼ釣り

11月-水質調査（生活排水）

12月-青のり漁の体験

1月-野鳥観察





みんなで川を描こう！



“じょれん”を使ったしじみ漁体験

▼活動の効果

「体験」をより充実させることはもちろん、毎回終了後子どもたちに日記を書いてもらったり、全体でフィードバックを行った。また、テーマによって全体での討論やワークショップ、模造紙を使ったまとめ、発表などを行った。その中で川の楽しさ・面白さ・怖さ、そして川と共に生きてきた人々の知恵や技を体験から学び、そしてまとめることや伝えることで、学んだこと感じたことを自分のものにし、より吉野川への興味・関心をいなくようになった。その思いは家族・友人にまで広がっている。また、地元の方を講師に迎えることや、ボランティアに参加していただいたおかげで、吉野川を中心とした多くのつながりや広がりが見えつつある。

▼苦勞した点・反省点

今年は毎年より参加者の平均年齢が低かったため、「水質調査」といったテーマでは、体験的な部分より頭で考える・知るといった時間が多く、少し難しい部分があったように思う。しかし、これらは川と共に生きる私たちにとって重要なテーマであるため、今後は「体験から学ぶ」の「体験」の部分より充実させ、スタッフ間の打ち合わせを今まで以上に密にし、手法を工夫していきたいと思う。

審査員から

川で子どもたちにさまざまな体験をさせ、川への興味・関心を芽生えさせている。体験部分が充実するといいですね。(M・M)

1年を通じた様々なメニューが用意されており、子どもたちが多くのことを学んでいることがうかがわれます。(F・Y)

川は楽校



ペットボトルを利用した「いかだ」で川流れ

▼活動の目的

校内研修の主題「互いに認め合い、自らを高めようとする心豊かな児童の育成」、副主題「生活科、総合的な学習の時間における心に響く自然体験学習を通して」を実践するために、「川学習」を中心とした活動を行っている。

4年は「川は身近な宝物～渡良瀬川中流の川や林を体験しよう」、5年は「自然は楽校～川と林を探ろう」、6年は「自然と人間～川と人とのかわり」をそれぞれテーマとして、多くの価値ある自然体験活動をさせることにより、目指す児童像にせまる。

▼活動の内容

4年では、渡良瀬川の中流を中心として、各季節の渡良瀬川を観察し多くの自然体験活動を行った。5年では、上流、中流、下流での活動を通して川の変化を多面的にとらえ、川や自然に対する知識・理解を深めていった。6年では、足尾鉍毒事件を中心として歴史的な学習と関連づけ、また、渡良瀬遊水池では葦原浄化システム等で人々の努力・工夫等を知り、河川敷サイクリングでは土地の利用にも目を向け、人と川との関わりの観点からも学習した。



6年生の渡良瀬川サイクリング



野鳥の会会員の指導のもと野鳥観察

▼活動の効果

児童は多くの自然体験活動を行うことから、自然に対する知識と理解を深め、自然を大切にしようとする心が育成された。また、活動の中から友だちと協力し、互いを認め合うことの大切さを学ぶことができた。

保護者や地域の方は、毎回多くの方が積極的に支援活動を行ってくれた。その中から学校の活動に対する理解が深まり、自然体験活動に対する協力態勢が整っていった。さらに、保護者同士の連携も強くなった。

▼苦勞した点・反省点

渡良瀬川での自然体験活動は、天候に左右されるため、悪天候等の場合の代替プログラムの設定が難しい場合がある。

本校は自然体験学習が校内研修の中心となっているため、他教科の学習との関連性をより明確にしていく必要がある。

6年生総合「川の汚れを探ってみよう」



先生、こんな生き物がいたよ

▼活動の目的

バックテストや指標生物の個体数調査を通して、どのくらい川が汚れているのかを調査し、川マップに整理する。また、調査結果だけではなく、調査地点の川の様子と見比べながら、川の汚れ方にどのような特徴があるのか考察し、きれいな川に戻すために自分たちに出来ることを考える。学習活動を随時ホームページで公開する。

▼活動の内容

調査する葛野川のポイントを上流1ヶ所、中流2ヶ所、下流1ヶ所に決め様子を調べた。バックテストや指標生物の個体数の調べ、川の汚れ具合を調査した。その結果を川マップにまとめ、調査地点ごと(上・中・下流)の汚れ方の特徴を考察し自分の考えを持った。また、川を守る森林の働きも考えた。



水生生物調査の方法を学んでいるところ



捕獲した生物を分類

▼活動の効果

指標生物調査を地域の専門家に指導していただき、捕獲法や分類法を分かりやすく教えていただいた。調査に参加した児童は、環境に対する関心が高まった。身近な地域の方を講師に招くことで、環境調査を通じて地域とのつながりを深めることができた。

学級通信やホームページを通じて、地域の人や保護者、下級生に校区の河川環境について調べたことを伝えることができた。地域の環境に関心を持った人を増やすことができた。

▼苦勞した点・反省点

例年より水量が少なく、生物個体数も種類も少なかった。水質調査結果も「ややかきたない水」であり、環境が悪くなっていることを肌で感じる結果になった。

毎年調査を行いたい、バックテストの試薬や講師招聘に関する費用の捻出が困難である。したがって今回の助成は大変ありがたかった。これからも継続した活動を行っていきたい。

川の自然の大切さを伝える生き物マップ



確認した魚の特徴をまとめる



4時間かけて“あしだ川さかなマップ”完成

▼活動の目的

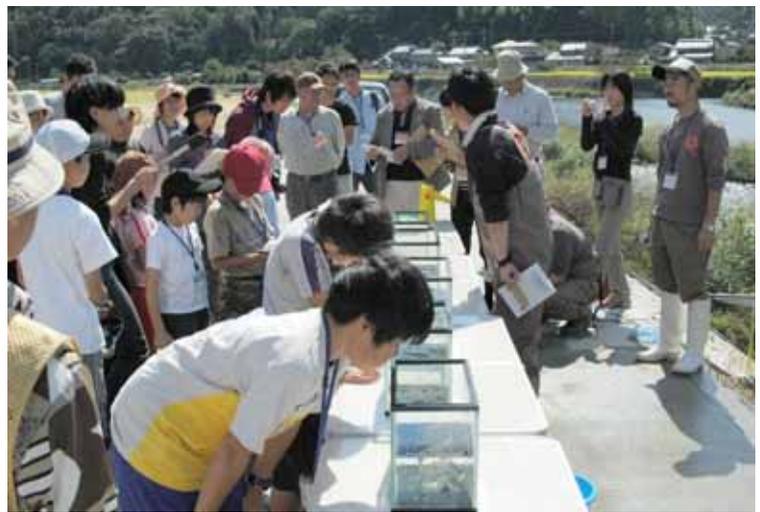
芦田川の汚れは、流域からの生活系の排水などが主な原因であり、水環境改善においては、流域住民が芦田川の現状を理解し、汚れた排水を減らしていくなどの取組が必要である。しかしながら、流域住民の芦田川に対する関心は依然として低く、芦田川イコール汚い川といったイメージが強く実践度も低い。このため啓発効果の高い流域の子どもたちを対象に水辺学習会を開催し、水辺の生き物との触れあいや水質調査などの体験学習を通じて芦田川への関心や興味を高めるとともに川の自然の大切さを伝えていく。また、子どもたちで芦田川生き物マップを作成する事で、更なる啓発活動への活用を図っていく。

▼活動の内容

水辺学習会は平成18年10月8日に、芦田川上流の府中大渡橋、支川出口川の2点において、流域の小学生（保護者含む）とスタッフなど総勢40名により実施した。調査は、生物や水質の専門家等を講師に、水辺の生き物調査（魚とりと同定）、水質調査（透視度計測、バックテスト：COD、リン、チッソ）を実施した。“マップづくり”（とりまとめ）は平成19年1月21日に“芦田川見る視る館”（国土交通省）を会場として実施した。各グループのリーダー等の有志が集まり、調査結果を“あしだ川さかなマップ”としてとりまとめた。今回は、昨年（H17年）と本年（H18年）の結果が比較できるようなマップとした。なお、芦田川の河佐峡において別途実施された“おさかな調べ”（めだかの学校）での調査結果も一緒にまとめる事で、3つの場所での違いなどが分かるマップとした。



調査することどもたち



河床の状態などによる生息種の違いなどを解説

▼活動の効果

活動後に参加者からは、「芦田川にも少し上流に行けばこんなきれいなところがあるんだと実感した」「今日は空き缶などのゴミも見つかったので、一人一人が気をつけて川をきれいにしていきたい」「草の下に隠れている魚がたくさん見つけてよかった」「珍しい魚も多くみられ、たくさんの種類の生き物が住む自然を大切に守っていきたい」などさまざまな意見があり、参加者への一定の啓発効果が得られたと考えられる。次年度以降も継続する事で、より一層効果を高める事が可能と考えられる。

▼苦勞した点・反省点

昨年同様に、水質の良い本川と生活排水が流入する支川の2地点での調査を行ったが、両地点とも調査日は比較的水質もきれいであり、当初の狙い通りの体験までにはいたらなかった。マップ作成では、昨年度の調査結果もあるため、2カ年の比較ができるようにとりまとめた。本年はもう少し早い時期を予定したが、他団体等のイベントが目白押しで、なかなか日程が定まらず開催時期が遅くなった。

博多川の今！救出大作戦



博多川の調査



河川敷に落書きや放置自転車

▼活動の目的

学校の横を流れる博多川について調べる
博多川の汚れが目立ち、過去を振り返ろう

博多川的环境調査
博多川のクリーンアップ作戦
生徒、地域の人たちへの報告と啓発活動

▼活動の内容

過去にも汚染が目立ち、町ぐるみで取り組んで綺麗にした歴史を調べた。現状の汚れについて、河川沿いを調査し、現状把握をした。今後の対策会議を開き、清掃活動を進めた。この現状を全校生徒や地域の人達にパネルにして報告した。また、HPを作成し、多くの人達に啓発する予定。

▼活動の効果

参加者は、学校側を流れる博多川について、当初何も知らなかったが、博多川の探索から調査、歴史調べを通して大いに関心を持った。その中でも、博多川は那珂川からの分流であったことや1.2kmしかない短い川でありながら、川端商店街など博多の町の中心に位置していた。清掃活動を通して、地域の方に清掃意識とわが町の環境美化や以前の活気を促す機会となった。

▼苦勞した点・反省点

清掃をしても、次から次へとゴミが溜まり、生徒たちに絶望感を感じさせる現実があった。しかし、一瞬しか持たない現状でも前向きに美化運動をする意識が根づいた。来年度も継続し、生徒への意識付けやもっと多くの人達を巻き込む活動にしていきたい。

審査員から

川沿いのまちが甦るよう美化活動を継続しており、地域みんなの力で復活するのを応援したい。
(T.H)

福岡市立博多中学校 パソコン部
大西 浩明 / 戸田 久太郎

jhhakata@school.fuku-c.ed.jp

<http://www.fuku-c.ed.jp/schoolhp/jhhakata>

地域の人たちが集える親水空間づくり



ビオトープで生物採集

▼活動の目的

能代川や「水辺サイクリングロード」の親水性や利用を高めるため、河川や環境に関係する様々なイベント等を開催し、地域の人たちが集える公園や親水空間にすることです。また、河川には魚などが生息するとともに水鳥なども集まり、自然の生態系を形成していることから、河川に対する理解を深め、これらの環境の必要性を学ぶことなどを目的としています。

▼活動の内容

高水敷に設置したビオトープ及び親水公園の整備
 ビオトープの整備や周辺の草刈り及びベンチの設置などにより親水空間の環境整備
 菜の花畑づくり
 高水敷の一部を菜の花畑にするため、開墾して花の種捲きの実施

▼活動の効果

高水敷のビオトープには、メダカ、とんぼ、カエルなど様々な生物が生息し、訪れた人の目を楽しませています。また、隣接してベンチやテーブルなども設置したことから、「水辺サイクリングロード」の休憩所として利用され、皆さんに親しまれています。

▼苦勞した点・反省点

高水敷のビオトープや親水公園は、何度か能代川の増水により、破損を受けるという事態が発生しました。また、予定していた自然観察会は中止となり、参加予定者はがっかりした様子でした。
 親水公園の環境整備では、付近にサイクリングロードの休憩場所が整備されたので、公園と併せ一体的な活用により、新たな交流に期待ができます。

スミウキゴリとシマウキゴリの遡上能力調査



ウキゴリ類の捕獲調査

▼活動の目的

長年、「油戸川」を調査フィールドとして活動し、河川水質調査や魚類調査を行ってきた。そこはウキゴリ類が多い川でウキゴリ類について調べてみた。ウキゴリ類とは、ウキゴリ、シマウキゴリ、スミウキゴリの3種類で、これらの魚は非常に似ているため近年まで1種類だと思われていた。調査から、油戸川のウキゴリ類は上流にスミウキゴリ、下流にシマウキゴリが多く生息しており、ウキゴリの捕獲は非常に稀なことから、殆んど生息していないことがわかった。そして図鑑等と見比べ、分布域に相違点があることを発見した。

油戸川では上流にいるはずのシマウキゴリが下流に、下流にいるはずのスミウキゴリが上流に生息していた。棲み分けについても掲載されていたが、私達のフィールド調査から、2種間では遡上能力の差が棲み分けを決定しているという結論に行き付いた。そこで、曖昧な形で掲載されている棲み分け条件の解明を目的とした。

▼活動の内容

遡上能力を検証するため、人工的に滝を作成してみた。そこでスミウキゴリとシマウキゴリの遡上能力の差を調べてみることにした。また、水温と遡上との関係も同時に調べてみよう、水温調節器も取り付けてみた。



シマウキゴリ(上) スミウキゴリ(下)



遡上能力実験装置

▼活動の効果

結果はシマウキゴリよりもスミウキゴリの方が遡上能力は高いことが判った。また、水温が低いと遡上しないことも判った。まとめたものは、各研究発表会で発表。

山形県高等学校総合文化祭（平成18年10月13～15日）でパネルセッション発表

山形県高等学校科学部研究発表会（12月11日、11の発表中2位で優秀賞を獲得）

内容が評価され、島根県で開催される第31回全国高等学校総合文化祭平成19年7月への参加権を獲得。調査対象のウキゴリ類の知名度を上げるため、加茂水族館・山形県立博物館・月山湖売店内の雑魚水族館で展示を行っている。

何よりも、この研究を通して生徒の川や魚類の知識を増やし活動意欲を引き出すことが出来た。



山形県高等学校総合文化祭パネルセッション

▼苦勞した点・反省点

人工の滝を作成したが、ウキゴリ類は思ったように滝を昇らなかった。原因は、水槽内がワンドとなり棲み易い状態になったことだった。そこで、常に滝壺にウキゴリ類がいる状態にしてみた。また、水漏れ等もあり、改良も2回ほど行った。

審査員から

質の高い調査と積極的な展示活動に今後も期待がもてます。（D・Y）

くらしをみつめよう～木頃川を守る～



何度拾ってもなくなるゴミ

▼活動の目的

総合的な学習の時間 テーマ「よみがえらそう木頃川～水質UP作戦～」において、水生生物の観察や校区の環境を守る活動をされている方の話を聞く活動、川辺の植物の観察などを通して、川の自然環境や水質保全について、児童自らが課題をもち環境を守るために自分たちにできることをつかませ、行動できる児童に育てる。



「少し汚い川」と判明

▼活動の内容

木頃川周辺の散策・植物観察
木頃川沿いの散策・植物観察を行い、木頃川の様子やその周辺の植物について関心をもち、地域の川や自然を再発見する活動となった。地域の川に住み着いたカモの様子を観察したり、継続的にお世話・観察している方から話を聞いたりした。水の環境と自然について考える視点が広がった。

木頃川をさぐる

木頃川の様子を観察したり水質検査を行ったりしながら、木頃川の状況に気づき、問題意識をもつことができた。

クリーン作戦！

自分たちが今できる取り組みを考え、木頃川中流や水路のごみ拾い・清掃活動に定期的に出かけた。

発信！！

一人ひとりが今まで学習した中から学校や地域に発信していくテーマを決め、新聞やポスターにまとめる。

▼活動の効果

川の様子や水生生物、川周辺の植物・生き物の観察を通して、より地域の川に親しみをもち、自分たちの生活と川の自然環境について関心を高めることができた。

水質調査から藤井川が少し汚れていることやゴミがたくさん落ちていることが分かり、みんなの藤井川をきれいな川にしていきたいという願いや意欲をもつことができた。自分たちにできることとしてまず、川のゴミ拾いや清掃活動を定期的かつ主体的に行うことができた。保護者の方も児童と一緒に清掃活動を行い、予想以上に川にごみがあることに驚いておられた。また、植物観察では、何気なく見ていた川辺の植物の名前やその由来を学んだり、それらの植物を使った遊びを幼稚園児に紹介したりしながら活動を楽しんでいた。さらに、専門家や地域の川に住み着いたカモを継続的に観察・世話されている方のお話を聞くことによって、水生生物と水辺の鳥や生き物により関心をもって観察することができた。

狐などに狙われながらも卵を必死に守ろうとする親ガモの姿から親の愛情を児童なりに感じ、食物連鎖、生き物との共存などについても考えるきっかけとなった。川の生き物についてさらに詳しく調べたり野鳥観察へと発展したりする児童の姿も見られた。観察や聞き取り活動などを通して、様々な角度から川の自然環境について考える視点をもつことができた。

全校児童および保護者に、1年間の取り組みについて発表するまとめをし、自分たちがどんな行動を起こしていくべきなのかを考え、ポスターや新聞作りを始めている。川の水質調査や自然環境について探求活動を行い、藤井川をきれいにしていくための問題解決能力を身に付けることができた。わたしたちの生活や生き物にとって、水がとても大切であることや、自分たちの生活が水や環境に大きな影響を与えていることに気づき、環境問題に対してより問題意識を高め、生活を見つめ直す態度ができつつある。自分の生活を環境と結びつけて考えたり、川が普段の遊びの空間になったりする面も強くなった。



月1回の定期清掃活動

▼苦勞した点・反省点

校内や学校関係者、保護者の方々へは児童が学習したことを発表する機会をもちやすいが、地域の方々への発信の機会や方法については、さらに工夫が必要である。児童一人ひとりの興味・関心に対応し、活動をより充実させるためには、活動の時間が計画以上に必要となる場合がある。ねらいを明確にするとともに他教科との関連を整理し、より綿密に計画を立てる必要がある。上流の散策や源流調査など、児童の願いがありながらも安全面の問題から実施することが難しい内容もあった。児童の安全面確認のための下見や児童移動の交通費、時間数の確保など課題がまだある。活動が天候にも左右される難しさもあった。

イトヨの保全から学ぶ



サワガニやドジョウなどたくさんの生き物を見つけました

▼活動の目的

第3学年の総合的な学習の時間を主な活動時間として、市の天然記念物に指定されているイトヨの生息環境を調べてイトヨの生息条件等について学ぶとともに、一層のよりよい環境づくりをし、一般に減少しつつあるイトヨを、本地区において将来にわたって守っていこうとする態度を育てる。

▼活動の内容

- 流域のイトヨの調査
- 同域の水性昆虫の調査
- 同域のその他の魚や生物の調査



グループをつくって調べ学習



発表会のようす

▼活動の効果

児童が川に住んでいる様々な生物について知ることができた。

講師の先生から川の生物についてのきちんとした知識を学ぶことができた。

校内で発表会を行い、学校全体に活動内容を広めることができた。

川の生物調査を行った結果、環境に対する関心が深まった。

▼苦勞した点・反省点

総合的な学習の中で行ったので、日程の調整や時数の確保が難しかった。また、講師の先生を招くまでの連絡と天候の影響も苦勞した点である。

熊野川は身近な自然の教室



石の裏をチェック



カヌー初体験

▼活動の目的

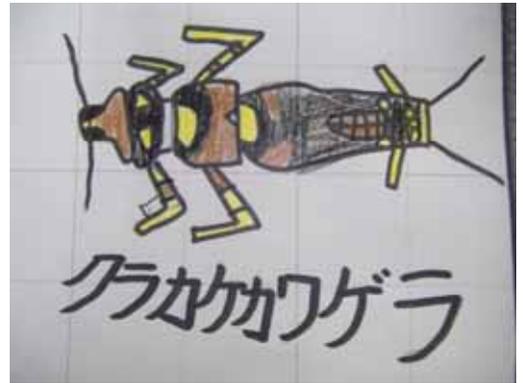
ふるさと新宮の身近な自然として熊野川についての理解と愛着をもち、その環境を自分との関わりの中でとらえ、水質やそこに住む生き物を調べることができるようにするとともに、環境の保全や創造に努力する態度を育てる。また自分たちが学んだことを発表会を通して広く地域に発信していく。

▼活動の内容

4年生は、川に住む生き物にふれる活動からスタートし、発見した生き物を調べる中で指標となる水生昆虫について学び、さらに川の環境を考える。6年生は、自分たちが興味を持ったポイントの水質検査をおこない、地域の川のきれいさを調べた。また、赤木川で専門家の指導の下、カヌー教室を行い、川に親しみ、地域の川に愛着を持ち、環境を守っていく姿勢を育むことができた。



学習発表会のようす



▼活動の効果

4年生は川の観察会に参加することで初めて水生昆虫にふれ、川の生き物に対して興味を育てた。

春、夏、秋と川にはいることで、水生昆虫の成長や変化を知るとともに、高田川の水の美しさを知った。

6年生は川の水質調査やカーヌー教室で自分たちでできる川の保全を考えることができた。

▼苦勞した点・反省点

川はその日の天候だけでなく、その前にどれだけの雨量があったかによって、当日観察がおこなえるかが決まる。そのため、活動日を決める際には講師先生にも都合のつく限り予備日を聞き、観察会を計画した。

熊野川の発表会を今年度は蓬莱小学校で2 / 13に計画（例年は夏休み）、そのため、4年生の川の観察会は春、夏、秋と行い、水生昆虫の変化も見ることができた。

石狩川水質調査を通して、環境意識を高める



高校生に教えてもらいながら



調査スタート

▼活動の目的

本町での中高一貫教育の柱である「地域・環境教育」の具体的場面として、総合的な学習の時間において水質調査を実施することによって、水源地としての地域環境に目を向け、関心を高める端緒とする。

▼活動の内容

総合的な学習の一環として中学3年生が、上川町内を水源地とする石狩川の水質調査を高校生と協同で行う（5月19日）。その中でGLOBE活動を行っている高校生から水質調査の具体的な方法を教えてもらった。また、札幌等、都市部域の水と上川地域の水との比較実験も行った。後日（5月23日）中学生単独で再度河川調査活動を行い、学習内容を追確認した。年末には水質調査発表会にも参加し、水質を保ちながら「自分たちにもできる環境教育」を学習した。

▼活動の効果

普段何気なく見ている「地域の川」に目を向けることで、地域環境の素晴らしさに改めて気づくことができた。また、調査からわかった「地域の水環境の良さ」を守るために、どの様なことを心がけるべきかにも関心を持つことができた。中高一貫教育の取組の中で行っていることもあり、高校進学後の取組への意欲付けとなった生徒も見られ、単年度の取組に終わらない活動展開にも期待がもてた。

▼苦勞した点・反省点

大きなことはないが、調査機材に関して中学校単独での追実験などを行うには不足が感じられた。今後、充実を図っていきたい。

平成18年度 川に学ぶ活動助成団体 都道府県順一覧表

頁	団体名	都道府県名	河川等	頁	団体名	都道府県	河川等
7	漁川子どもの水辺協議会	北海道	漁川	41	ずしし環境会議 まちなみと緑の創造部会	神奈川県	田越川
21	沙流川愛クラブ	北海道	沙流川	53	和泉川東山の水辺愛護会	神奈川県	和泉川
115	上川町立上川中学校	北海道	石狩川	106	九十九曲がりの会	新潟県	能代川
22	NPO 後志利別川清流保護の会	北海道	後志利別川	17	加賀市立東谷口小学校	石川県	動橋川
25	湧別川流域会議実行委員会	北海道	湧別川	37	女鳥羽川の自然を考える会	長野県	女鳥羽川
61	環境フォーラム北海道	北海道	精進川	31	長野ホタルの会	長野県	善光寺平用水他
71	NPO 登別自然活動支援組織モモンガくらぶ	北海道	胆振幌別川	70	三峰川みらい会議	長野県	三峰川
3	NPO 白神自然学校一ツ森校	青森県	赤石川	63	松川水環境保全推進協議会	長野県	松川
49	山形地区住みよい環境推進協議会	青森県	浅瀬石川	14	名古屋堀川ライオンズクラブ	愛知県	堀川
86	白川ダムビジョン推進会議	山形県	置賜白川	81	岡崎市立美川中学校	愛知県	乙川他
93	森の仲間たち	山形県	堀立遊水地	35	草津塾	滋賀県	葉山川
107	山形県立加茂水産高等学校 水産生物部	山形県	油戸川他	79	琵琶湖市民大学	滋賀県	野田沼
55	NPO 水環境ネット東北	宮城県	広瀬川	45	EIZOH.COM	京都府	紙屋川
74	多賀城市第二中学校	宮城県	砂押川	51	梅津まちづくり委員会	京都府	有栖川
4	さくら湖自然環境フォーラム実行委員会	福島県	大滝根川	73	兵庫県南あわじ市立南淡中学校	兵庫県	百間堀
13	蔵のまち清流づくり実行委員会	福島県	田付川他	75	自然と文化の森協会	兵庫県	猪名川
19	須賀川に清流を取り戻す市民の会	福島県	下の川	77	猪名川フォーラム実行委員会	兵庫県	猪名川
56	西郷くらしの会	福島県	阿武隈川	101	丹波市立西小学校	兵庫県	葛野川
95	浜尾遊水地再生協議会	福島県	浜尾遊水地	67	五條市立阿太小学校	奈良県	吉野川
11	銚田市立新宮小学校	茨城県	北浦	113	新宮市立蓬萊小学校	和歌山県	高田川他
59	美浦村立美浦中学校 科学部	茨城県	霞ヶ浦他	69	ふる里発見の会	鳥取県	日野川他
65	東茨城郡大洗町立祝町小学校	茨城県	那珂川	1	馬木っ子ふるさと環境探偵団	鳥根県	砂田川他
99	邑楽町立中野東小学校	栃木・群馬県	渡良瀬川	89	でさきっくらぶ	岡山県	出崎海岸
111	那須塩原市立鍋掛小学校	栃木県	清川	87	サンちゃんと友だちになる会	広島県	江の川
5	邑楽町立高島小学校	群馬県	渡良瀬川	103	芦田川環境マネジメントセンター	広島県	芦田川
28	半田せせらぎ会	群馬県	利根川	109	尾道市立木頃小学校	広島県	藤井川
57	桐生市立東中学校	群馬県	桐生川	97	特定非営利活動法人 吉野川みんなの会	徳島県	吉野川
47	NPO 川島ネイチャークラブ	埼玉県	荒川他	15	香川の水辺を考える会	香川県	有明浜
9	国分川夢クラブ/まつどの川づくり楽会	千葉県	国分川	85	筑後川まるごと博物館 運営委員会	福岡県	筑後川
23	NPO 印旛野菜いかだの会	千葉県	印旛沼他	105	福岡市立博多中学校	福岡県	博多川
43	木更津工業高等専門学校	千葉県	平川	83	自然と暮らしを考える研究会	佐賀県	厳木川
24	NPO 都市環境研究会	東京都	神田川他	33	NPO 五ヶ瀬自然学校	宮崎県	五ヶ瀬川
38	日野市立滝合小学校	東京都	浅川	96	NPO 大淀川流域ネットワーク	宮崎県	大淀川
91	NPO あそんで学ぶ環境と科学倶楽部	東京都	日本橋川他	29	薩摩川内市立入来中学校	鹿児島県	樋脇川
92	隅田川市民交流実行委員会	東京都	隅田川	39	NPO マングローブEEクラブ	沖縄県	中城湾東海沿
93	ふるさと侍従川に親しむ会	神奈川県	侍従川				





自然と暮らしを考える研究会の皆さん（佐賀県／巖木川）

水辺のかがやき ～平成18年度「川に学ぶ」活動事例集～

平成19年12月 発行

編集発行

財団法人リバーフロント整備センター

〒102-0082 東京都千代田区一番町8番地 一番町FSビル

TEL: 03-3265-7121, FAX: 03-3265-7456

「川に学ぶ」活動助成事業事務局 担当: 研究第一部 児玉、永井
